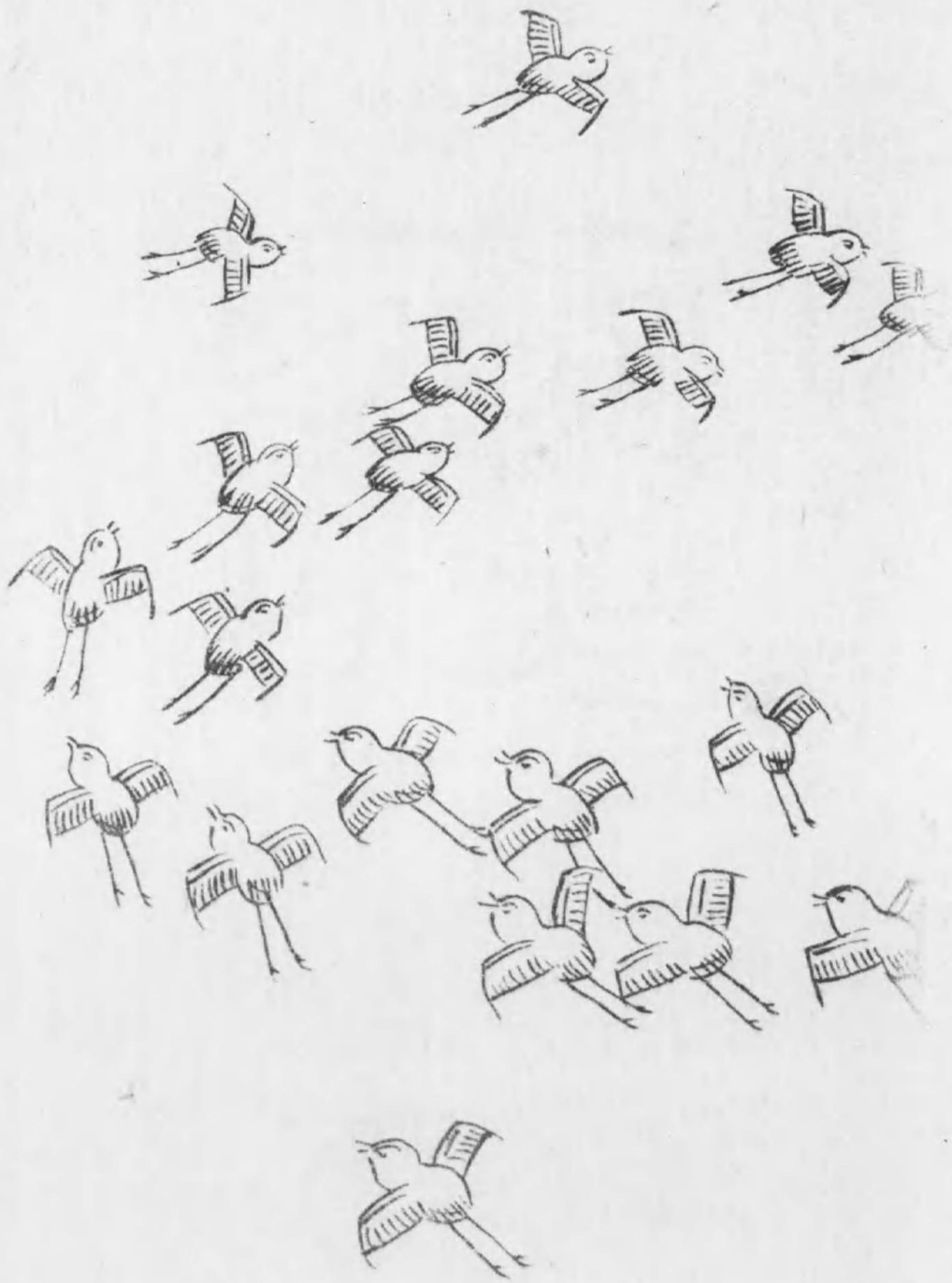
特116
709

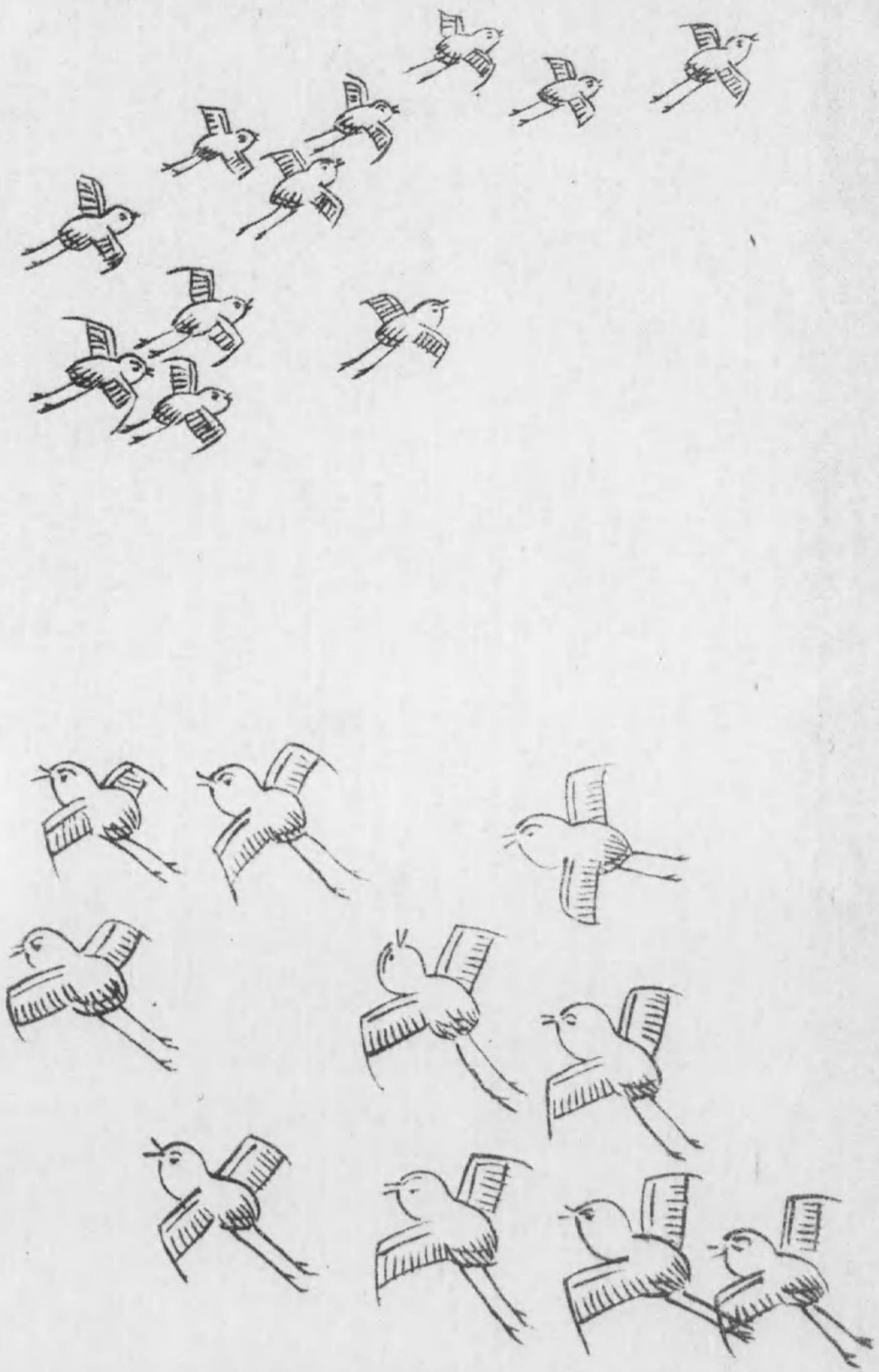
觀世流改訂謠本

内十九

白髭
盛久
佛原
善知鳥
小鹽

特116
709





大正
10. 12. 27
内交

文學博士

明治四十年

井上頼圀 本文監修
丸岡桂 本文訂正
観世清之 節附訂正

大正五年

丸岡桂 解解 并補訂
山崎楽堂 拍子附訂正
観世流改訂本刊行會 節附様式統一

大正十年

山崎楽堂 拍子附再訂正

白髭

解題 天皇御靈夢あらはれて敕使を白髭社にさくれたるに、明神出現して社稷の縁起を陳ず、亦奇特を現じて御代を祝ひしことを作る。五番曲除くに出でたり。二百十番謡曲錄に觀阿弥作、能本作者註又に金春禪竹作とされども、共に古記に據るところ無し。曲名に白髭の字を當てたるもあり。

謡ひ方梗概 竹生島に似通ひたれど、それよりは通じて荘重に厳粛なるべきものとす。**シテ** 老翁かれどさのみは抑へず、強くとしたる方かるべし。**出の一聲**は真之一聲の位をとりて大きやかに靡りと静かるべく、**サシ**よりは少しさらりとかるべし。**下歌**にて緩め、**上歌**を謡ひくくと朗かに謡ふ。「比良の山風」云々の通しはツレのみに謡はせシテ謡はず。**ワキ**との**問答**は位を保ちて落着好く靡りと兼ね應ふ。**サシ**は心持を新にし、クリ地の位よりも軽やかにすらりと謡ひ、「われハ相成道の後」云々はおつとりとあるべく、クセの**上端**は引き立てて靡りと、「今は行を捨ふべしと」をぶしして靡りと止む。**後**は老いたる神胎かなれば十分にどつしりと、威有つて大なるやう扱ふが宜し。此心得にて「神は人の敬ふによりて」云々と出で、「いざくさらば」云々を謡さらりめに、「面白や此舞楽」は好くシテを助けて謡引、一静に、「かくて夜もはや明方の」は心持を剥にして寛りと謡ふ。**ツレ** 人にて謡ふ處はシテよりも調子を高めにとるべし。**ワキ** 靡りとして清く淀み無きを旨とす。**後**の「あらあ地」初の「瑞垣の」云々はりがたの」云々はサシの調子にてさらりと扱ふ。どつしりと出で、「後もしや」と廻シの後を少し抑へ、「われは」よりは前に比べて少しさらりと扱ふ。**クリ**は改めて靡りと謡ひ起し、**サシ**以下すらりとあるべし。**クセ**は花莚、歌舞のクセと佛せて俗に三難クセと称する謡ひにくきクセなれば能く師傳を得て究むべきも、凡は極めてどつしりと扱ひ、渡雑かるる節の局にこせつかぬやう心掛けを要す。「夕べの雲」云々は一聲の調子にて節大きく謡ひ出し、「神さび渡れる」より位を保ちて稍重々しかるべし。「不思議や」云々は弛みなきやう乗つて謡ふ。「神楽備馬楽」より「天地の両燈あらはれて」より勢よく速やかに乗つて謡ふ。「夜もはや」云々は稍静に靡りと附け、「天つ御空の」云々を乗らず進み、「龍神湖水の」より位を進め、「明け行く空も」にて鎮めて謡い納むべし。

解解 **當今** 當代今上の意。其時代の聖上。**白髭明神** 近江國比良山の麓、滋賀郡小松村の北界大字鵜川の明神崎にあり。松屋叢書に「白髭

明神は比良明神の一名なり、正體は猿田彦神にて(中略)本地は不動明王なり」。**霊神** 霊験あらたなる神。**九重** 帝都 **花園** 天智天皇の時に造られし遊覧地の跡といふ。**志賀の山越** 京都北白川より(如意の峠越しに志賀へ出づる道。如意越ともいふ。近江の名勝。**真野の入江** 金葉集に「鴨なく真野の入江の浜風に」云々。今の真野村の邊。古へ入江ありしも今は埋れて田地となれりといふ。**鳴の浦** 琵琶湖畔。**波も白髭** 波の白きを白髭にかく。**釣のいとなみ** 釣の糸を業の意なる掌みに掛く。**隙も波間** 漁業のたしなみに暇無きを波にかく。**渡りかねたる** 漕小舟にて水上を渡ると、漁業にて浮世を渡るとを兼ぬ。**風帰帆を送る** 云々 詩句なるべきも未だ典據を知らず。**程** みち。**舟子** 舟人 **霞の衣** 云々 霞を衣に譬へ、衣の縫ぶを花のほころびにかく。**花さそふ** 云々 新古今集の歌。末句「跡見ゆるまで」。**比良** 近江國滋賀郡にあり。湖中最高の山。**浦わづき** 南つ。**天つ雁** 空行く雁。越路は北越の遠々。この附近より琵琶湖越に越路へかけての山々の見渡さるるとなり。それを云はんとて雁を出す。玉葉集の歌に「霧わけて秋は越路の天つ雁帰る雲居もまだ霞おかず」。**御代に近江** 値ふを近江にかく。**瑞垣の小舟** 云々 我は心も無きといふを波小舟にかく。**久しに逢ふ** 久しく逢はざるを、茲には直に久しき意に用ふ。**ぶし波の** 云々 **夫れ此國の起り** 云々 以下クセ前まで、全文太平記巻十八「比叡山開闢の事」より取る。**第九の滅劫** 云々 佛教にて算数の及ばざる長大の年月を劫といふ。而して此世界の成立より破壊に至る四劫に分ち、世界の空間より漸次成立する期間を成劫、成立せる世界の住持する期間を住劫、漸次壊滅する期間を壊劫、壊滅し盡して空虚となる期間を空劫と いふ。此住劫の中、最初人壽八万四千歳より百年毎に人壽一歳づゝを減じて人壽十歳に至るまでの長大の時間を一減劫と云ひ、次に人壽十歳より百年毎に人壽一歳づゝを増して八万四千歳に達するまでを一増劫と云ひ、一減劫と一増劫とを合せて一小劫と称し、小劫を二十回反覆するを中劫と称せり。此には此第九回目の小劫中の減劫に於て人壽二万歳まで減ぜし時に迦葉佛出世せし、當時釈迦牟尼佛未だ都率天に住しゐたりとなり。**迦葉世尊** 佛教に過去七佛といふ中の第六佛、即ち釈迦の前に出世せし佛。世尊とは佛を尊みていふ称号。佛十号の一。**西天** 西方にあり天竺國の意。印度をいふ。**大聖** 最大なる聖人の意。佛を尊びていふ。**釋尊** 釈迦牟尼世尊の略。釈迦は種族の称。牟尼は名。世尊は尊称。迦葉佛、人壽百歳の時に至らば釈迦出世して成佛すべしと嫁言したるが、釈迦は其嫁告を受けて其時期の来る迄都率天に待ち居たりきとなり。**都率天** 佛説、欲界に六天あり中院外院あり。其内院に菩薩の最後身住すと説かる。第四重の天なり。之に内とは降都率、託胎、出生、出家、降魔、成道、轉法輪、入涅槃。**八相成道** 佛が此世に出現するに八種の相を示す意。成道は八相中の一なれども最も主要なれば其名を特出す。八相世界の意に用ひらる。**一切衆生** 云々 涅槃経の文。如来即ち佛は法界の真理を證得したるものなれば常住にして異変改易あることなしとの意。太平記には「一切衆生悉有佛性、如来常住無有変易」と立つ浪の喜あり」。**南瞻部洲** 南閻浮提ともいふ。もと想像上の地理的名称にて須彌山の南方の海中にある洲の名なれども、後廣く此世界の意に用ひらる。**大宮権現** 日吉神社の別称。比叡山の麓、坂本村にあり。比叡山の守護神なり。明治維新の際大宮権現の称を去り官幣大社に列せり。**波止土濃** 大宮の前なる板橋を指す。欄干ある廊造なれば拝殿といふ。之を波止りて土こまやかなりなどいふは例の常語附會の俗説なり。**其後人壽百歳の時** 云々 ここまでは凡て太平記の文に拠り、クセの一章は凡て曽我物語巻六比叡山坂の事の文を用ひて隆と せり。人壽百歳は前に解ける第九減劫の人壽次第に減じて百歳となりし時の意。**悉達** 釈迦牟尼の出家以前に於ける名。詳しくは薩婆悉達多。**八十年の春** 釈迦入滅は其八十歳の二月十五日なりしとさして いふ。此年齢は方等泥洹経には八十二とせり。**頭北面西** 云々 頭を北方に、面を西方に向け、右脇をば牀席に著けて臥するをいふ。佛入滅の時の臥法なり。**跋提** 尸頼拏跋提河の略。釈迦此河の邊なる林中にて入滅し給ふといふ。佛の肉身は跋提河邊に入滅したれども霊は常住不滅にして周遍法界の妙體なれば何の處にも化現するを得となり。今比叡の山麓、琵琶湖畔に来れりといふ。**中津國** 日本の古名、豊葦原中津國の略。**鶴草葬不合尊** 彦火々出見尊の御子。母は豊玉姫。**妙事** 曽我物語の文字に拠ふ。原書にはもと「たへなることと」と接みしなるべし。**比叡山** 山城近江の両國に跨る山。延暦寺の在所。京都を距ること東北三里半。**佛法結界の地** 結界とは一定の地域を区劃

して制限すること。密教にては一定の地域に魔障を入れざる爲之を結護する修法あり。茲には叡山を以て諸魔の近接妨害する能はざる佛法修行の清淨安穏なる場處となさんとなり。

寂光土 常寂光土の略。法身如來の住する眞常究竟の國土。

淨瑠璃世界 藥師如來の在る淨土。其清淨なること瑠璃寶の如くなるより名づく。

藥師 譯くは藥師淨瑠璃光如來。東方淨瑠璃國の教主にして十二の誓願を起し衆生の病災を救ひ佛果に到らしめんとする佛。

後五百歳 佛入滅後の佛法流布の狀態に就きて五百年を一時期とし、五時期を劃して五五百年といふ中、最後即ち第五の五百年には佛法隱沒して修行する者なく闘諍を事とすべしと説かれたる其五百歳を後五百歳といふ

われし此山の主 「主」字、元和卯月本には「王」とあり。昔は「王」と謡ひしものか。曽我物語は「守護」なれども太平記には「主」に作れり。

二佛東西に 藥師は東方に、釈迦は西方に。

天燈龍燈 天女と龍神との捧ぐる燈明。

八少女 八人の舞姫。

宜禰 神に仕ふる司人。きねが鼓、きねが鈴など古歌に見ゆ。

神は人の敬ふによつて 云 と 古語なるべし。巻絹の謡には「それ神は人の敬ふによつて威を増し、人は神の加護によれり」とあり。

神樂 上古より傳りて神事に奏する樂。

催馬樂 里巷の歌謡を唐樂によりて曲譜を作り、遂に儀式宴席等の餘興に用ひしもの。

糸竹 絃樂と管樂と。

善哉々々 讃賞歡喜の詞。

白鬚（シラヒゲ）

三月

前ジ 漁夫　後ジ 天女　後ヅレ 龍神（謡ナシ）

シテ 白鬚明神（前ハ漁翁）

ワキ 勅使

ワキ次第上（三人）ツヨク 君と神との道すぐに。君と神との道すぐに。治まる國ぞ久しき。

ワキ 抑これは當今に仕へ奉る臣下なり。偖も江州白鬚の明神は。靈神にて御座候。君此程不思議の御靈夢の御告ましますにより。急ぎ參詣申せとの宣旨を被り。

唯今白髭の明神よ
教使よ系詣仕れ

道行上（三ノ）

唯今白髭の明神よ。教使よ系詣仕れ
九重（ここのへ）の。空も長閑（のど）けき春の色。空も
長閑けき春の色。霞む行くへの花園
の志賀の山越（やまこえ）ち過ぎて。眞野（まの）の
入江の道をば。鳥の浦風さえかへり。
立ちよる波も白髭の。宮居（みやゐ）は早く著
きよけり。宮居は早くつきよけり

詩人仝

真ノ一声

釣の營み。いつまでか。隙も波間よ。明け
暮れん（二句）柳さへ。なるる海小舟。渡りか
ねたる。浮世かな。

風情帆を送る

萬里の程。江天澄（すま）くそして水光平ら
なり。毎年解くこれ明日朝の雨。面白や
夏しも今は春の空。霞の夜ほころびて。
峯白妙よ。咲く花の。嵐も白ふ。日影

（下歌中）……

なる　賤しき海士の心までも春とそ

（上歌）

長閑けかりけれ。花誘ふ比良の山

風吹きよけり。比良の山風吹きよけり。

漕ぎ行く舟の跡見ゆる。鳥の浦わも

遥々と。霞み渡りて天つ雁。帰る越路

の山までも。眺めよつづく氣色かな。眺め

よつづく氣色かな。（早笛）いろこれまる。

（シテ）さんば比浦の漁夫

よていが。朝か朝か沖へ出で釣を垂れば。

まづ所姿を見奉れば。此あたりまてハ

見馴れ申さぬ事なり。（早笛）都より

の使ハ詳しそ。座ゐら（早笛）げによく見て

あるものかな。これハ當今より仕へ奉る

臣下なるぞ。君此程不思議の霊夢の

申告まゐまをより。教使よ。和詣申し
て。ありがたや君をてだよかほど
まで。敬ひ給ふ神の威徳の程をそ
ありがたけれ。賤しき海士の此身ま
でも。まぐるる代よ。迦江の海の。深き
恵を頼むあり
作ぎ。神を敬ふ心あらば。なぞら恵よあづ
げよ誰をても君を

地上歌

かぐらん　弥すらこふ　處から
瑞垣の。年も経ぬよけり白髭の。年も
経よけり白髭の。神の誓ハ今をても。
変らぬぎりけり。げよありがたや頼もしや。
われい心も波小舟。釣の翁の身あぐ
らも。安くたのむ此時よ。生しあ身ハ。
ありがたや生れあ身ハありがたや

クリ上ル

打掛 そ（又元）し此國のおこり（又元）家（又元）より傳（ツタ）へる所。おの（又元）おの別（舎）して。その說（舎）まちゝ（又元）なりと（又元）いへども。暫（キ）らく記（キ）する所の一義（イチギ）によらば。

天地（ナンテン）既（スデ）に分（ワカ）つて後。第九の減劫（ゲンコウ）人壽（ニンジュ）二萬歲（ニマンサイ）の時（コロ）

●サンクセ獨ヤ

出世（シュッセ）し給（タマ）ふ。釋尊（シャクソン）西天（サイテン）より記（キ）を得（エ）て。兜率（トソツ）天（テン）より住（ジュウ）し給（タマ）ひ

シテ上

われ〳〵相（ソウ）傳（デン）の後。遺教（ユイキョウ）流布（ルフ）の地（チ）

どれの處（トコロ）ならあるべきとて　地（チ）上（ウワ）南膽（ナンセン）

部洲（ブシウ）を普（アマネ）く飛行（ヒギヤウ）して居覽（ヲリ）けるよ。

漫（マン）とある大海（ダイカイ）のよう。一切衆生（イツサイシユウ）悉有

佛性（ブツシヤウ）如來（ニヨライ）。常住（ジヨウジユウ）無有變易（ムウヘンエキ）の波（ハ）の聲（コエ）。

一葉（イチヨウ）の蘆（アシ）に凝（コリ）固（カタ）まつて。一つの島（シマ）

となる。今の大宮（オホミヤ）權現（ゴンゲン）の。橋殿（ハシドノ）あり

打切

其後、人壽百歲の時、桑蓬と生れ給ひて。八十年の春の頃。頭北面西右脇ト拔提の波と消え給ふ。されども佛は常住不滅法界の。妙體なれば昔。蘆の葉の島とおりし中つ國をば隨覺ぞ。ゆ時は鶴草。葦不合の尊の古代なれば佛法の妙事を人知らぬ。愛よ比叡

山の樒さく波や。志賀の浦のほとりよ。釣を垂るる老翁あり。釋尊かれよ向て。翁も。此地のまたらば此山をわれよ與へよ。佛法界の。今の地とおもべーと宣へば。翁答へて申まやう。われ人壽六千歲の始より。此山のまとして。此湖の七度まで。蘆原よりしをも。

地 拍子 かおく(を) 又 かおくや(も)

正よ見たりし翁なり。但し此地。古界と
なるならば。金をつる所失せぬべしと深く
惜み申せば。釋尊力なく。うい〻敷出よ。
帰らんと給へば 時に東方より
地 浄瑠璃世界の主薬師。忽然と出で
給ひて善きかな。釋尊この地に佛
法を弘め。給ひし事よわれ人壽二萬

地 拍子 はや(を)

歳の昔より。此處のまたいで。老翁
いまだわれを知らぬ。何ぞ此山を。惜み
申せばはや。開闢給へわれも此山の
主となりて。共に後五百歳の。佛法を
守るべしと。固く誓約し給ひて。二佛
東西よ去り給へ。其時の翁も今の白
髭の神とかや。不思議なりとよおほど

ゆさんそて　ゆも

まで。妙なる神秘を語る翁の。其名は
いうよおぼつかな　今は何をうつむ
べき。其いすへも釣を垂れ。翁なるぞ。
教使を慰め申さんそて。唯今ここよ
りたり。ここさら今宵は天燈龍燈。
神前に来現の時節なれば。暫らく
待たせ給へ　地上歌　べの雲も立ち

騒ぎ。ぬべの雲も立ち騒ぎ。ぬよ落ち
来る風の音老の波も寄り来る。釣の
翁と見えつるぞ。われ白髭の神ぞとて
ほのぬ扉を推し開き社壇に入らせ給
ひけり　社壇に入らせ給ひけり　来序中入
上　ハ少女の。返さて袂の色こそ。宣播の鼓
も聲澄みて。神さび渡れるをりから

出端（謡物）

（行平）後シテ上ゲ

かな　神ハ人への敬ひによつて威を
増ます。元又てやこれい教の使。行ぎても
猶餘りあり　地上歌（行平）不思議や社壇の内
（行平）打上ゲ
より打込ノ返シ（行平）も。不思議や社壇の内よりも。眞よ
物なる古聲を出し。扉もおのづから。
朱の玉垣なつかしき度る。白髭の。神の
（行平）日カケ上ル
姿。現れたり　（行平）あらありがたの所
事や。かゝる奇特よ達よ事も。唯これ
君の古蔭ぞと。感涙袖を濕せり　シテ　いざ
いざさらば夜もまだから。舞樂の曲を奏
しつゝ。教使を慰め申さんと　地上歌　神樂
催馬樂そりぐ。神樂（打切）催馬樂そり
そりよ。孫竹の後ら（中切）祝曲を盡し。（中切）拍子
を揃へて夜遊の舞樂ハありがたや

シテ中
樂 打上刻返
面白や此舞樂の。
地中
面白や此舞樂の。
中二八
鼓ハおのづから。
上ヘ
鳴うつ波の聲。
上ヘ
松風ハ
心耳を澄
琴を調め。心耳を澄ましたりからよ。
合ヒ天急
上ヘ
天つ空の雲居かやき渡り。湖水の
面鳴動をるゝ天燈龍燈の来現かや
上歌
出端ニテ天女出デル
早笛ニテ龍神出ヅ
打上打返
天地の雨燈現れて。天地の雨燈現
打返
れて。神前に供らふる燈燈の光。山河

●獨吟

草木赫き渡り。日夜の勝劫見えざり
シテ中
けり
龍神舞働 静 打上打返
シテ中
ちくて夜もはや明方の
地
ちくて夜もはや明方よ。おのく
明神よ。暇申し。帰れば明神も
日神も
聲を上げて。善哉善哉と感じ給へば
天女ハ天路よりとゝ帰れば。龍神ハ湖
水の。上に翔つて。波を返し。雲を穿ち

て天地より別れて飛び去り行けば。明け行く空も白髭の。明け行く空も白髭の神風浩まる古代そぞ。ありよける。

盛久

解題

平家の臣土馬盛久、観音信仰の利益によりて死を免れたることを述べり。長門本平家物語、又は其類本に據りたる作なり。申楽談儀の後人の記入に永正十一年十月南都雨乞びの能に演せられしことを見る。禅鳳問道目録にも曲名あり。言継卿記には守久の字を當つ。二百十番謡目録に元雅作、能本作者注文に世阿弥作とあれども明ならず。廢曲に此前篇とも見るべき生捕盛久あり。

謡ひ方梗概

大體静謐にして沈み勝ちなるも、底に充分の抑揚有りて確りと雄々しかるべく、心持後段等處に應じて変化多く、節も複雑にして扱い易からざるもの少からざれば、具に練磨を積むを要す。

シテ 確乎たる信仰を持し、従容死に臨む盛久の沈毅なる風采を強く表すべし。初の**ワキとの問答**は聊か沈痛の氣を帯びて然も悠然と言ひ、一息の間をとりて殊勝に**サシ**を謡ひ出す。**一聲**は都の春に名残を惜む心なればしっとりとあるべく、**二ノサシ**にて又調子を別にすらりと扱ひ、**ロンギ**は聲を下目に取りて少しも派手にならぬやう承け渡す。**三ノサシ**は心静に人生を観じて独言つ處なれば、心して確りと強ひ、「かくてながら」と氣を更へて詞に移り、**カケル**にて本の位に戻し、かっしりと止む。次の**ワキとの問答**は命旦夕に迫りながらも恐れず驚かず、未練も執着も無きふり落ち着きて確りと言ふべく、「ありがたや大慈大悲は」より懇に祈願して陞文を讀むところ、最も慎ましやかに氣を籠めて扱ふ。「あら不思議や」云々は夢より覚めたる心にて、稍低く静に言ひ、「待ちもうけたる」云々の一節は驚する氣色無くキッパリと出で、**カケル**を確りと注大きく、節扱ひ稍ゆるやかに、**ワキとの掛合**、確りと運びをつけ、「盛久やかて座に直り」云々の詞を特に泰然として弛みに確りと言ふべし。「盛久も思の外なれば」は巧まずに出で、然も軽くならぬやう、以下**掛合**は順次かゝって鋭く、**物着後**の問答は穏やかに應ふ。**クリ**は強くきらりめに、**サシ**は確りとして稍ゆるやかなるが宜しく、「ありがたや」云々は爽やかに言ひて勇み立つ心ながらを更へて推々しく、寛りと受け渡し、「長居は恐あり」あらはには出さず、「武士前後をかくみつ」よりはズカ〳〵と強ひ、**物着後**の問答は穏やかに応ふ。**ワキ** 位軽からぬやう確りとあるべし。**ロンギ**は前と心持の一句を帰めてかっしりと強ふ。「武士前後をかくみつ」と連吟に注文を強むあたりは特に意を留めてシテに合せて慎重なるべく、「盛久は」云々の詞はは強くならぬやう確りと扱ひ、又「いかに盛久。盛久は」云々は荒くなるべく、「帰る春なき名残かな」はすべく、シテと連吟に扱ふ。**地** 初の「帰る春なき名残かな」は承けてシテより引き立てめにりと言ふが宜し。**ワキツレ**(太刀取)は慇懃にして軽きやうに扱ふ。

附け、「たきつ心を」赤間ヶ関、「思はざる外の」より、下歌、上歌へかけ、道行とはいへシテの感慨をも溢び表すなれば餘り浮き〳〵と楽りて詞はぬやう、所どころ〳〵のやぎたる處あるが宜し。ロンギは前よりも少し引き立つれども派手になるべからず。「妖女の如くんば」云々は更へて ゆるやかに確りと出、上歌は高からぬやう静にら歌まりよく、唄次どんよりと扱ふ。妖女は手堅くさらりめに出て、「所詮や」と少し鎖め、「やがて妖由」より住を聊か進まーむ。「道とあるべきも、堅も軽々となるべからず。ロンギは箱引き主て、扱ひ、「命は千秋高歳の」より晴れやかに、辛りは運び よく爽やかなるべし。

辞解

盛久 平家亡びし後、主馬入道盛國が末子八郎左衛門盛久、越中次郎兵衛盛次悪七兵衛景清等宗徒の者共、源家の目を蔽みて諸所に隠れ居たるうち、盛久は下女の告訴によりて捕へられ、鎌倉に召し下されて由井が濱に斬られんとしたるが、清水観音の利生によりて一命助かり、本領を返し賜はりたるのみか、越前池田の庄をも賜はりたるらを長門本平家物語に悲しく出づ。妖曲はこれに依りたるものなり。但、盛久の事は妖長門本以外に見當らず。曲尊の東國下(現観世流番外、三曲のうち)は盛久の東下りの道行を作りたるものにて、本曲にはそれより陽りたる辞句多し。

土屋殿 土肥次郎實平の笑、土屋三郎宗遠。

清水 京都市東山五條坂上。こゝに音羽山清水寺あり。本尊は観世音菩薩。

南無 梵語、帰命と譯す。佛菩薩に向つて敬礼を求むる意。「南無や」より「稲頼みあり」まで三井寺と同文なり。

大慈大悲 仁愛の廣大なること。

観世音 慈悲の徳を司る菩薩。

さしも草 新古今集に出でたる清水観音の歌に「なほ頼めしめぢが原のさしも草われ世の中にあらん限り」といふなるに、さしも草は蓬の異稱にてさしもの序辞なり。

さしも畏き あれほどまでに尊き。

一稱一念 観音の御名を一度称へ一度念ずるだに利益ありといふなるに、まして辛来観音を尊信して帰依を請き、再會の期なき別離をしなり。き(来)

いつかは 何時か又来りて清水寺の花盛を眺め得らるべきを清水にかけ、花盛を承けて春と應ず。

音に聞てぬ 聲に出して言はねどもたぎつ心(わきたつ思ひ)は人知るまじとの意

音を音羽山と重ね、音羽の滝をたぎつ心に掛く。音羽の滝は清水寺の南崖にあり。

見渡せば 古今集の素性法師の歌、下の句「都ぞ春の錦なりける」の錦を織り来り永錦選御の故事に據りて故郷の空と詠く。

弓馬の家 武士の家。

跡白河 跡をも知らずといふを白河に掛く。白河は北敵山の南、志賀越より出で白川村に至り南禪寺の西より右折して祇園の西を流れ、鴨川に入る川。

私坂 誰を待つと私坂に掛く。山城國宇治郡山科村日ノ岡の坂路の一。

四の辻 東田口十禪師辻(妖編今無)にて妖邊四宮河原の稱あり。

こゝも此 後撰集の歌、「かともいへど浮ならず。」

四の宮河原 四の宮は山科村の大字。淀水北より遠く、瀬川の源に近江の國に屬す。もとは山城近江の分界廟にてこゝに日本最古の關あり。

鳴海潟 今は尾張國愛知郡の南邑となれり。緒を往ろに住ひ干潟となりて今は海岸より一里餘を距つるに至れり。昔にも田れば野邊となるといふを鳴海に掛けたれば、當時既に海岸と距りたるなるべし。

八橋 三河國碧海郡知立町の大字。杜若の古跡。今は東海道を北に距る七町なれど往古の官道は尾張の二村山より境川を越えこゝに出でしものなり。

高師山 三河遠江の國界に跨る丘陵。西を東に下れば潟名湖なり。東國下に「山は高師の名のみ」て野里に道やつくらん」。

汐見坂 遠江國濱名郡白須賀町の東南なる坂路。南に大洋、東北に富士を望み、吉東眺望を以て名あり。東國下に「波の満干の汐見坂、雨崖天に連れり、雪に濯ぎ入る沖つ舟」云々。

橋本の濱名の橋 同郡新居町大字濱名の芭蕉を橋本といふ。こゝに濱名の橋を架けたること三代實録に見えたり。後世度か海嘯の為地形変じて湖海相通ずるに今日の如くなれり。

旅衣 新古今集の西行の歌「年たけて又越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」を後作し、旅衣

の縁深なる箭(き)を来てに掛く。**小夜の中山** 遠江國小笠郡二郡の交界、東海道日坂、金谷二驛の中間なる坂嶺。正しくは『さやの中山』。**大井川** 遠江駿河の國境にある大川。秋川は吉来幾度か其流域變遷するを以て変る瀬瀬といへり。**宇津の山** 駿河國安倍志太二郡の界嶺、東海道丸子岡部二驛の間、波も打つを宇津に掛く。**清見潟** 清見の関の関あり、関に来(き)を清見に掛く。駿河國庵原郡興津の清見崎と安倍郡三保崎(三保の松原)との間なる海湾を清見潟といふ。其南は三保の入海即ち今の清水港なり。**三保の入海** 古清見の関あり、関に来(き)を清見に掛く。駿河國庵原郡興津の清見崎と安倍郡三保崎(三保の松原)との間なる海湾を清見潟といふ。其南は三保の入海即ち今の清水港なり。**田子の浦** 同國富士郡元吉原村邊の海濱といふ。吉田博士地名辞書には庵原郡蒲原町の内なる吹上の邊を正しとすとへり。山部赤人の田子の浦の名吟を引きて雪の富士の嶺とつづく。**明けゆくや** 箱根山を承けて箱の明くると夜の明くるとにかく。**星月夜** 鎌倉山の桃河。正しくは『ほしづく夜』。**鎌倉** 相模國鎌倉郡にあり、頼朝の幕府を開きし處。**百年の榮華** 云〻 白樂天の『百年富貴夢中事、一旦榮華風前塵』より脱化せしものか。**かゝる身** 鎌倉山の雲霞のかゝるを斯る身に掛く。**御下向** 都より地方へ向ひ行くをいふ。こゝには鎌倉へ到着せしことをさす。**披露** 公に發表すること。**最期** 命終の期。**なからん跡** 死後。**回向** 死後一遍の念佛を手向けて冥福を祈ること。**二世** 今世と来世。**彼御經** 観音の妙力功德を説ける法華經第二十五の普門品を指す。**願** 薩埵は菩提薩埵の略。観音を指す。『十方三世の諸佛の大悲を集めて観世音菩薩の体とす』。**薩埵の悲** 悲心の佛心法要に定れる業報も観音の妙力によつて轉じ換ふるを得るとの意。**定業亦能轉** 前世の業因によりて現世に受くることの悲住運自然に衆生を濟度し得るといふ。**無縁の慈悲** 無縁は佛心に所縁なきの義。佛陀の慈悲。**益** 云〻 若し現在世に利益なくば誰も来世に義利(浄土)に生ずる事を願ふものあるまじ、現當二世の希望空しく徒ら事となるべし。**今生の利** 普門品に出づ。洲濱せば『或は王難の苦に遭ひて刑に臨みて寿終ら』。**或遭王難苦** 云〻 普門品に出づ。観音力を念ぜば彼の観音の力を念ぜば刀寸々に壞(と)れん。**衆** 語、法華經に出づ。**怨悪退散** 普門品に出づ。もろ〻の怨敵悪鬼退散せん。**種々諸悪趣** 云〻 同じく普門品にあり。『種々の諸の悪趣、地獄(餓)鬼畜生、生老病死の苦、以て漸く悉く滅せしむ』と説む。**夕露の命** 有難しといふと夕露にかけ、はかなき命を譬へて露の命と續く。**昔山靈山** 云〻 『昔山靈山衣法華 今在西方名阿彌陀、娑婆示現観世音、三世利益同一体』の偈文に據る。秋陽は南岳大師の作と傳ふれども其著書に見えず。後世天台宗の僧の假托せしものならんといふ。悪心の佛心法要には『極樂稱爲無量壽、娑婆示現観世音』の句あり。**終の道** 死ぬること。**八聲の鳥** 曉の雞をさ

の玉の緒 數珠を念珠ともいへば、念ひの珠と云ひかく。今は、命の意なる魂の緒に云ひかく。**宰より宰** 云〻 宰より引出して囚人を送る宰與に乘せしむ。**由比の汀** 鎌倉町の南海濱、およそ稲瀬川滝川の間をいふ。**座敷** 坐席の意。現時通用語の座敷にあらず。**座に直り** 首の座に着席すること。**太刀取** 首切役。長門本平家物語には土屋三郎宗遠が太刀取なり。**鎌倉殿御前** 共に頼朝を指す。**不取正覺の御誓** 彌陀の四十八願各其誓りに不取正覺の語あり。其意立つる所の願若し成就せずば正覺の果位に入らじと誓へるなり。佛心法要に観音の誓願を説いて『一切衆生を悉く成佛せしめ畢て後菩當に成佛すべし、若し一人も殘りて』は正覺を取らじと、又往生要集に『観世音菩薩言、衆生有苦、三稱二我名、不往救者、不取正覺(弘猛海慧經)』とあり。**初夜** 云〻 晝夜六時の分け方にて初夜は午後八時頃、後夜は午前四時頃、一點は其一時を五に分ちたる第一點。**蕭然** 静かに、寂しく。**六窓** 六窓一條の譬喩として眼耳鼻舌身意の六根を六窓に喩へたる詞あり。こゝには意識の漠然として明かならざる意を含みて富瞞のまだ解きをいふにや。拾葉抄には夜の明け六つに掛くといへり。**耿然** あかるきさま。**八旬** 八十歳。**香染の袈裟** 香衣のこと。香染は木蘭色として黄に黑みを帶びたる色、もと乾陀羅といへる香木の汁を取りて染むるに依る。香衣は我國にて勅許の色衣、但し其色は宗派に依りて異同あり。袈裟は僧の着する三衣の總稱。**鳩の杖** 頭部に鳩の形を刻みたる杖。老人の用ふるもの。宮庭にて老人に賜はりしは此杖なり。**妙聞** 妙音の誤なるべし。拾葉抄に引きたる琵琶法師の平家物語に『小松殿熊野参かげ鎌倉殿まで知しめし召したる兵なり』。**小松殿** 平重盛。拾葉抄に『名にしおはば』云々。**人の國** 外國。**唐が原** 相模國片瀬川の東の原。夫木抄に『名にしおはば虎や臥すらん東野にありといふなる唐が原』。**鶴が岡** 千秋の鶴を鶴が岡に掛け、岡の松と續く。鶴が岡は鎌倉宮の下。八幡宮の所在地。**松の葉** 云〻 古今集の序に『松の葉の散り失せずしてまさきの葛長く傳はり』を引く。松の葉は散失せずの序、正木の葛は長きの序、長くを長延に轉ず。

四五番目
累二番

盛久（モリヒサ）　三月

シテ　盛久
ワキ　土屋三郎
ワキヅレ　太刀取

シテ詞　如何（カ）に土屋殿に申さるべき事のは
ワキ　何事（コト）にてはそ
シテ　唯今（ヒ）閑東（カンタウ）に下りなば。
これ限りなるべし。清水（キヨミヅ）の方へ輿（コシ）を立てて
給たりとも
ワキ　それ
シテ　易（ヤス）き所事。如何（イカ）
に面（メン）々。東山（ヒガシヤマ）の方へ輿を立てられいとへ
シテサシ上　南無や大慈大悲の観世音（カンゼオン）。
ヨワク

さも畏き御言の末。稱一念猶頼み
ありまして年月の過ぬる結縁
空しからんや。あら名残惜しや
一セイ上ル
とうとう清水寺の花盛　地　帰る春なき。
名残かな　シテ　音羽山
地　たきつところをぞ知らぬ　シテ　見渡せば
柳櫻をこきまぜて。錦と見ゆる故郷
の空　地　といつかたと思出の限なるべき
東路よ。思ひたつことそ名残なれ　シテ　われ
なまじひよりも馬の家に生れ。世に隱
れなき身そ　地　思ひざるりの旅行
の道。南の東へ走けば。あと白河を。行く
はのいつ帰るべき。旅ならん　下歌　哀ハ
誰をか松坂や四の宮河原四つの辻

上歌、

これや此行くも帰るも別れては。行くも帰るも別れては。知るも知らぬも逢坂の関守も今のわれをばよも止めじ。勢田の長橋うち渡り。立ち寄る影は鏡山。さのみ年経ぬ身なれども。衰へは老曽の森を過ぐるや美濃尾張。熱田の浦の夕汐の道をば波に隠されて。

まとれば野べよ鳴海潟。又は橋や高師山又は橋や高師山。潮見坂橋本の。濱名の橋をうち渡り。旅衣かくまで見んと思ひきや。命ありけり小夜の中山これかとよ。変る瀬の大井河。過ぎ行く波も宇津の山越えても関よ清見潟。三保の入海

田子の浦うち出でて見れば真白なる。
雪の富士の嶺。相根山。猶明け行くや
星月夜はや鎌倉よ。着きぬるけりはや
鎌倉よつきぬるけり」夢中よ道あ
て塵埃を隔つ。げにやそこも知ら
ざりし。山を越え水を渡って。此関東
よ著きぬ。百年の栄華は塵中の夢。

一寸の光陰は沙裏の金。げにや故郷は
雲居のよそ。千代もと契りし友ども。
変るせなれやわれ一人。鎌倉山の雲霞。
げにもろる身の習かや。かくてあるらん
諸人よ面をさらすよりおつぞれ疾う
斬られいざやと思ひはあら痛やや
盛久の獨言を作せり。いろは申し。土屋ゲ

歎りて土屋殿そばや此方へ御入
りゆく御下向の由を披露申して
ゆくゆく急ぎ謀申せとの御事ありて
唯今も獨言よ申して如くかくてあるらく
諸人よ面をさらさんよりもあつぱれ
疾く斬られぬるやとの念願さてはや
適ひてゆよさて最期ハ唯今ありて
や度最期ハ此暁ら。然らぬぞハ明夜かと
作せ出されてゆは　さてい暫らくの時
刻ありてゆよ。偖も此程土屋殿の密芳志。
申まもなくおろかなり。又無からん
亦一遍の念佛も密廻向よ頼からぞ。
カれ中ヨク
こせまでの密芳志たるべ。われ此年月
清水の觀世音を信。毎日かの御經を

怠る事なり。さりながら今日は未だ讀誦
申さぬ程なれば。門暇を賜はりぬべかの門
徒を讀誦申したくは　それとそおり
がたきゆへ。土屋もこれを聽聞申さう
ぎるとそは　ありがたや大慈大悲ハ薩
埵の悲願。宗業京能轉ハ菩薩の直
道とかや。願ハくハ無縁の慈悲を垂れ。

われを導き給へ。今生の利益も
捨げば。後生善所をも誰か頼まん。二世
の願望も空しくば。大聖の誓約
豈虛妄ならぬや。或曹王難苦臨刑
欲壽終。念彼觀音力刀尋段々壞
ありがたや此門徒を聽聞申せば。門命も
頼もしうとそはべ　げにいとど聽聞

いものか。此文をいつも。假令人生難の災に遇ふとても。その劒段に折れ

口カ八上ツヨク

又衆怨惡退散ていふ文は。射る矢も其身に立つまじければ　げに頼もしや

さりながら。人命のために此文を誦

るよあらば。種々諸惡趣地獄鬼畜生

生老病死苦以漸悉令滅　此文の

如くぶ。もろくの惡趣をも三惡道に

通るべしやありがたしとて露の命に惜

まぬ唯後生をぞいかにせん　上歌・昔在

靈山のちかはは法華一佛。今西方の

主又。娑婆示現絵ひてわれらがため

の觀世音。三世の利益同じくば。かく刑

戮に近き身の。誓ひいとて演べきや。

盛久が後の道よも闇からで頼もしや。

シテ「あら不思議やなかりし睡眠の内よあらたなる霊夢を蒙りてはいうよあらありがたやなし」

早カケ上「既よ八聲の鳥鳴いて。世最期の時節唯今なりはやく所出でいへとよ」

シテ「待ちまうけたる事なれば。左よ八金泥の法華経。右よ八念の珠の緒の。

カケ上「命も今を限りなれば。とてぞ此世を門出の場よ。思弱くて立ち出づる」

早カケ上「武士

シテ「前後をかこみつつ。とてぞ別の島の聲鐘も聞うる東雲よ」

早「宰より籠の輿よ乗せ」

シテ「由比の汀よ」

早「急ぎけり

地次第上「夢路を出づる曙や。夢路を出づる曙や。後の世の門出なるらん」

早カケ上「さて由比の

汀に着きしかば。座敷を定め敷皮敷かせ。
はやはや直らせ給へと　シテ　盛久やがて
座に直り。清水の方はそなたぞと。西に向
ひて観音の。御名を唱へて待ちければ
太刀取後にまはりつゝ。称念の声の
下よりも。太刀振り上ぐれば　こはいかに御
経の光眼に塞がり。取り落したる太刀

を見れば。二つに折れて段々となる。これ
そもいかなる事やらん　シテ　盛久も思の
外なれば。たゞ茫然とあきれ居たり
やゝ何とも疑ふべき。此程読誦の
御経の文　シテ　臨刑欲寿終。念彼観
音力　刀尋　段々壊の　経文あら
たなる霊験に。剣段々に折れにけり。末世

そはなおりけり。あらありがたの御経や。
やがて此由聞しめ。急ぎ武前よ来れ
とのご使度とよ重なれば。召よ隨ひ
盛久は。鎌倉殿よ参りけり鎌倉殿よ
参りけり」 物着 「いとよ盛久武前よ出ては。
君この暁不思議なる霊夢の御告
あり。盛久も若夢や見けるこの御

事ぞとは 「何をか隠申べき。今夜
不思議の霊夢を蒙りては 「さらば
その霊夢のやうを武前よ真直よ
申しあげられいく 「畏ては そそれ
不取敢賢の御ア誓。今以て然又ならぬ
曷去久人哀れの大悲の光いづくに到の
所ならん 「然るよわれ此光陰を

頼み日夜朝暮よ怠らぬ。かの御経
を修讀せ。よとゝりわき此時即刑
戮よ近き身を思て。行時怠る事
もなく初夜より後夜の一點まで
蕭然として坐したりよ六窓
に未だ明けざるよ。寂然たる夫虚明なる
内よ思ひもの。旬よたけ給ひぬと見

能ノ時ハ来りたり。

えさせ給よ老僧の。香煙の袈裟を
聽け水精の珠數を引繰り。鳩の杖
よまゝりつゝ。妙南たゞしき古聲よて。
われ洛陽東山の。春の水のあたりより
汲ためよ来りたり。本より大意大悲の。
誓願なゞら空しからん。唯一音なり
とても。われと念ずる時節の王難の

地拍子
超えたり。

シテ上 さいはい過ぐべし。況や此年月の誠を抽んでく。殺生人よ超えたり。心安く思ひべしわれ此ぬ。命よ代るべしと宣ひて夢ハ即ち覺めぬ。盛久貴く思ひて歡喜の心限なし！ 頼朝 地 これを聞しめ。此曉の夢ハ想も。因 地 告ぞとあらたなる信歡ハ限なし

シテ上 其時盛久人ハ。夢の覺めたる心ちして。感涙をとめかねぬ前を罷り立ちけれぬ。 地上 いろよ盛久暫しとて。此篠を上げて召されば せん方もなき盛久が 地中 命ハ千秋萬歲の春を祝ふぞと。此盃を下されぬ。 シテ上 種ハ千代ぞと 地上 菊の酒 地上 花を受けたる。袖かな

よきびのおどりあれば

いらつ盛久。盛久は平家譜代の侍武略の達者。殊よりは乱舞堪能のよし聞しめ及ばれたり。一年小松殿北山にて茸狩の遊路の酒宴に於て。主馬の盛久一曲一奏の事。関東までも隠れなし。殊更これは喜びのおどりあれば。唯一さしその時所望あり急

おどりからぶそ

●仕舞

ぞ仕つへ。ありがたし。ありがたし。得難き時。さり難き時。さり難き貴命なり。盛久

かゝる時節に達事。せいて例ある

べからぶそ。治まり靡く時なれや。天四海

の内のみならず。人の國まで日の本のもろ

こゝ原もこのところ。男舞 地キリ上 打上(謡掛)酒宴半

の春の興。酒宴半の春の興。尽らぬ日

地柏子
松の葉の散り

ゆゝしき心の

影長閑にして、君を祝ふ千秋の鶴ぞ岡の。
松の葉の散り。失せぬして眞折の葛
長居は怨あり　長居は怨あると四隣り
申し住り。退出けける盛久ぐ。心の中ぞ
ゆゝしきぞゆゝしき。

解題　佛御前の亡霊、加賀國佛原に現じて狂儒に後生を乞ひ、又在りし昔の姿にて舞ひしことを作れり。春日社殿方諸日記に世阿弥の作と傳へられども、德とに美しく静かなる者註文、二百十番謡目録に世阿弥の作と傳へられども、之を證すべき古記無し。古きに別名を佛御前といふ。

謡ひ方梗概　住はほぐ中にしもどことなく然を含みて寂しかりける佛御前」と静に大きやかに呼掛け、**ワキ**との問答は信をもちてしとやかに承け應へ、「さらば具名をあらはすべし」をさらうめに出で、しめやかに言ひ、**掛合**に入りて須次少しづゝ柔を柔せ行き、**連吟**を確り謡ひて地へ渡す。**サシ**は優にさらりと素直に、以下水同じく、クセの**上端**はおつとりと謡ひ、**ロンギ**は浮きく、せわやう徳やかに承け渡し、止メの「草堂の」を殊にテ穿に扱ふ。**後**は優しくすらりとして前程には静めざれども、さりとて花やかにならるを好まず。**出**の謡は**サシ**かれば稍さらりと謡ひ出し、「速寺の鐘も無に響き」と締めて内へ取り、次句を忘つくりと扱ひ、「嵐烈しき」を物柔かに本バリに張り、「假寝の床に」と少しかゝつて、「夢ばし」云ことをおつとりと謡ひ止む。「恥かしながら」云ことは内へ取りて出、次第にハツキリと扱ふ。**掛合**は頭次に謡ひ、「佛の舞の妙なる袖」は柔を少し更へて、一声の調子に取り、寛りと、**ワカ**は改めて稍晴れやかに、以下の**地との掛合**は依ぢにならるゆやう乗つて、心して謡ひ、「嵐吹く雪水の」にて平ノリに更へ、物静に抑へてしつとりと止む。「不思議やな」云との詞は、獨言のやうに言ひつゝ徐にシテに向ひかくる柔かなるを宜しとす。「不思議やな」云との詞は、獨言のやうに言ひつゝ徐にシテに向ひかくるなれば、初は稍下に取りて出で、頭次に少し引き立つる心なり。**待謡**は少し寂しげに扱ふ。**地**の**上歌**は更へてしつとりと出で、「野もせにすだく」と確り、次句を内へ取って「山風も」より稍さらりめに、止メの返しを緩めて浸みぐとしたる情景を謡ひ表す。**クリ**は改めて喜を少しく上に取り、確りと謡ひ、**サシ**以下は稍すらりとあらべし。**クセ**は釋教に寄する心を旨と静に浮かぬやうに謡ひ、「花一時の」云ことを少し引き立て、「常樂なり」と一旦謡ひ緩めて、以下を破の住にとり、上端後を稍さらりとしたら味はひに扱ふ。**ロンギ**は更へてさらり心に承け渡し**中入前**を物静に謡ひ納むべし。**後**は**シテとの掛合**を花やかに流れ水のやうびしつゝ、寛やかに待鹿に扱ひ、**キリ**も幽玄に、大事に扱ひて静に謡ひ納む。

辭解　**よそは**　稍の云　餘所はまだ紅葉の残りかまるに、雪の絶ゆる事無き白山を尋ねんとなり。秋深き、深き雪、雪の白といひかく。**白山**　加賀飛騨

の両國に跨れる高山。其絶頂所前嶽（一名禪定）に白山神社あり。伊弉冊尊を祀る。**禪定** 行を修するを云ふ。白山禪定は古くより行はれたる事蹟者に出づ。**遥々と越の云々** 遥々と来しを越に掛け、白山知らと競を奉ねて後とす。越は加賀能登、越前越中、**天照す神** 雲が天に照りわたるを天照大神にいひかく。泰澄法師白山を開かんとせし時、山神天女と化現し「我は伊弉諾（冊の誤りなるべし）尊なり。今妙理大菩薩と號す、天照大神は我が子なり」云々と云ひし事の元亨釋書に見えたるを胸におきて綴る。**祚** 大神の母なるも意を含む。**拵** 紅葉ばの血しほと染みたる歌句あれば、孟も血に掛け見えたるを胸におきて綴る。**佛の原** 今詳かならず。佛御前らくの出かれば佛と名づけしにか。源平盛衰記に「六日は佛が原、金剛宮へ入れ奉る。此明神と申すは、崎嶮天皇の御宇、弘仁十年に此所に祝ひ奉りて三百五十四年也」云々。金剛宮は文明年間の廻國雜記に依りて加賀國石川郡鶴来町に近き下白山の地に存りしもの。如く思はるゝより、佛の原をも此地と推定する説あり。又越前國之國町の月窓寺は其跡なりとも傳ふ。**草堂** 草の庵。**機縁** 善根の機ありて教法を受くる縁となること。**思ふ日** 其人を思ふ日。**五障三從** 五障は法華經提婆品に「女人の身、猶五障有り、梵天王、帝釈、魔王、轉輪聖王、佛身の五となるを得ず（取文）」。三從は孔子家語に「女子（中略）有三之從之道、幼從父兄、既嫁從夫、夫死從子」。源平盛衰記にさらでだに女人は五障三從とて罪深き御事にて侍りしとも。**清し言通** 清土の譯語。狭衣物語に「このひと巻ばかりは、すゞしき通のしるべにもなりなんとぞ思ひ」。**佛御前** 白拍子。加賀の生れなるも京都に住し、當時專にせしも後妓王の和歌に感じて人生の榮枯を悟り、密に邸を遁れ出で、十七才にて尼となりて妓王の庵室に結れ、妓王、妓女、母刀自の三尼と共に念佛を事とし、時こそ遥遠られ、往生院に共に往生の素懐を遂げたり。**成佛の縁ある** 生前の名も佛、所も亦佛の原なれば、成佛の縁ありと云へり。成佛同向文なり。一人佛は佛果を成ずること。**一佛成道** 一項四句の偈文。淨土宗の有情非情成佛回向文なり。一人すべて成佛すること。**野も せたすだく** 野も狭きまでに集る。**平相國** 平清盛を指す。相國は太政大臣の唐名。**妓王、妓女** 妓王の清盛の寵世に時めけるを、たはら痛く思ひ、一日清盛の邸に推参して舞曲を奏し、其妙技にいたく清盛を動かし、遂に妓王にかはりて嬖寵を專にせしも後妓王の和歌に感じて人生の榮枯を悟り、密に邸を遁れ出で、十七才にて尼となりて妓王の庵室に結れ、妓王、妓女、母刀自の三尼と共に念佛を事とし、時こそ遥遠られ、往生院に共に往生の素懐を遂げたり。**成佛の縁ある** 生前の名も佛、所も亦佛の原なれば、成佛の縁あり。成佛同向文なり。一人佛は佛果を成ずること。**一佛成道** 一項四句の偈文。淨土宗の有情非情成佛回向文なり。一人すべて成佛すること。**野も せたすだく** 野も狭きまでに集る。**平相國** 平清盛を指す。相國は太政大臣の唐名。**妓王、妓女**

京都堀川の白拍子姉妹。幼にして父を失ひ、一日母の病を石清水に祈る道にて清盛に知られ、母子三人西八條の邸に召され妓王最も寵遇せられしも、後に佛御前に寵を奪はれぜを憂きものにおもひて尼となり、京都西嵯峨に庵を結べり。時に妓王廿一歳、妓女十九歳、嵯峨の往生院は其跡なり。**刀自** 支那にては今東老母の称なれども日本にては年たけたる主婦の意に用ふ。こゝには佛御前といふ。本には、とぢ）らが尊堂と四人一所に入れられたり」とあるを綴り後ゆたるものにて、この引文の刀自は妓王、妓女の母なる白拍子をさすなること、同じ物語に「妓王妓女とて姉妹あり。刀自（覺一本には、とぢ）といふ白拍子が女かなり」とあるにて明かなり。**温顔** 素和にして親色ある面ざし。**玉衣** 美しき衣裳。玉は次の露の縁語。**露** 白拍子が着る水干などの袖に垂れたる花。**をゝみ** 止みといふに同じ。**思ふ事** 云々 「思ふこと適はねばこそうき世なれ」といふを上の句とし、次の「花」にかゝる。**優色** すぐれて美しき意。次の「花」にかゝる。**花一時の** 云々 岩姿と寵愛とを花の盛に喩ふ。**いつ數き** 云々 新古今集に「いつ数きいつ思ふべき事なれば後の世知らで人のすぐらん」。**教なれ** 此機會に達ひたる即ち佛の導き給ふ教なりとかり。**彌陀の御國** 阿弥陀佛の座す極楽淨土。娑婆世界より西方に在りといふより、そなたと云ひて西山に續く。平家物語に「夕日の影の西の山の端に隠るゝを見ても、日の入り給ふ所は西方淨土にてこそあんなれ。いつかわれらもかしこに生れて、ものを思はで過さんずらんと」云々。**西山** 京都の西方の山山。**うきぞ世の嵯峨** 「さが」は習はしの意。浮世の習はしといふを、妓王が尼となり庵を結のさがなれば」云々。**樵をかへ** 俗尼の姿になること。**執心** 執着の心。妓王は浮世を捨てたれども、ともすれば佛御前を怨みたること、妓王の詠りたる詞に見ゆ。**真の佛** 今までは右のみ佛なりしも、今よりは心までも佛の如きゝ人よとの意。**岩代の松** 誰とかなはんの意を岩代にかく。岩代は紀伊日高郡にあり。古へ、松の葉を結びて契をかけたる風俗あり。**白雪の** 云々 いづくとも知らぬ意を白雪にかく。心草集に「ふみわけてとはしよう結ぶの縁語とす。なるにや。**草衣屑花が袖** 草原に消えゆく安のほのかさを、草を衣とし、屑花を袖とせしなら如く見たてゝ綴る。**とことはに** 長く。假寝の床の

音を受く。**御法**　こゝにては護経。**夜もすがら**　終夜。**山蔭**　月の落ちかくる山と続けて「かくる」の序とする為に蔭と云ひ添へ、蔭を吹き返す意を以て嵐を出し、漢語なる夜景を叙す。**夢ばし**　夢をばの意。しは意を強めたる詞。**草枕**　旅のかりね。佛の原の草と続け、草枕の語に続け別れたる「ふし」（法ふし意）の音を借りて遊女を受く。**輪廻**　衆生が六道に輪轉して生死極り無きを車輪に譬へたる語。こゝには再び安盛に見え来りたるといふ。**極樂世界**　阿弥陀佛の淨土。此所に歌舞の菩薩ありて演奏を絶なずといふより、歌舞を受けて出し、更に此原の名の佛と云ひかけて、己の舞と歌舞の菩薩の舞に寄ふ。**ひとり猶**　云一遍上人の歌「ひとりなゞ佛の所名やたどるらんおの〳〵帰る法の場人」を更へて出す。法の場人は教法を聞く人。**前佛、後佛**　佛説に此世界の生じたる初より出現せし佛を過去七佛、其最後の佛を釈迦牟尼佛とし、次で出現すべき未来の佛を、今兜率天の内院に在りと想像せられたる弥勒菩薩とし、弥勒は釈迦の滅後五十六億七千萬年にして安盛に現れ、釈迦の後を継ぎて人天の化益をなすべしとせられたり。今は釈迦入滅の後にして、弥勒佛を後佛といふ。**夢の中間**　前佛後佛の中間未だ出でざる中間の世なれば、釈迦を前佛といひ、弥勒佛を後佛といふ。**夢幻の一睡**　虚生が邯鄲の枕に臥して一睡の中に人世を夢みたる故事を胸にお き此世。**夢の如**　云　平家物語に出でたる妓王の朗詠に「佛も昔は凡夫なり、われらも終には佛なり、いづれ佛性具せる身を、開くつるのみこそ悲しけれ」とあるを含み、佛なければ衆生もなりとの意を述ぶ。嵐はあらじに掛く。**天に浮かめる**　古今集真字序に「浮天之波起於元一滴之露」。大海の水も一滴の露より起り、其露を初に返し見れば終に無に帰して何物も無しとなり。**一歩拳げざる**　云　一歩拳げざる前、即ち未だ何の動作をも迎すを受けて舞の袖と続く。佛前が謡ひたる歌として出せるは似通ひたる小唄のあるしなるべし。

三番目

佛原（ホトケノハラ）

九月　シテ　佛御前ノ霊（前ハ里女）
ワキ　旅僧

ワキ次第上（三人）
よそへ捨の秋深き。よそへ捨の秋深き
雲の白山（シラヤマ）幸ねん　ワキ付
これは都方より
出でたる僧にて候。われ未だ白山禪定（イマ　シラヤマ・ゼンジョウ）
せぬ程なり。此秋思ひ立ち白山禪定と
志して候（打切ヤ）道行上（三人）盆（ボン）と云ふ。越（シヲ）の白山知らぬ
り。越（打切）の白山知らぬ者なりし。そなたの雲

も天照らす。神の御の紅葉ぞ。極楽の色もいや高き峯と早く廻り来て紅葉詣でるぞ。ありがたき紅葉詣でるぞ。ありがたき　口説

急ぎい程よ。これはや加賀の國佛の原でやらん申い。日の暮れて程よ。これなる草堂よりそも寄り。一夜を明さでやと思ひ　呼掛　のうく

おれなる所僧。何とて其草堂よりは泊りぞ　口説　不思議やな道もなく里もなき方より。女性一人来りつて。われよ言葉をかけ給へ。いうなる人とまでまそぞ　シテ　これい此佛の原よ住む女とそい。時もとてあれ今宵も。此草堂よ泊りとそ。ありがたき機縁とまでませ。

日よ當れりよも

けふい思ふ日よ當れり。中に經を讀み佛舍
事をなしてだび絵へさきだよ五障
三從の此身なれば。迷の雲も晴れ難き。
心の水の濁りをまもまして。清き道よ
引道すし絵へ 日本紀 経を讀み佛舍事を
なせと為る。それとて出家の沒なれ。
さてく再び申まをべきと者ハ誰よて

草堂のよも

おまもそ さらば其名を著をべし。
いへ佛法前と申しし白拍子ハ。此國
より出でし人なり。都よ上り舞女の
譽世よ勝れ絵ひしが。後よハ故郷お
れでて。此國よ帰り。終よとて堂
くなる。跡の去るも。此草堂の露と
消えよ。其跡なり 日本紀 不思議や備ハ

名所もとも

去へ。其名を聞そ。佛性前の。なき跡
までも名をとゞめて　佛の原といふ名
所も。昔を留むる名殘なれば　今弔
ふも疑ひなき。成佛の縁ある其人の
名も頼もしや。一佛成道　見聞法界
草木國土。悉皆成佛と聞く時は
佛の原の草木まで。佛の原の草木まで。

●小謠

地上歌

皆成佛の疑なぎ。ありがたやをりからの。
野もせまだく。虫の音までも聲佛
事をやあ。ぬらん。山風も夜嵐も。聲
澄み渡る此原の草木も心。あるやらん
草木も心あるやらん。猶く佛性前の
所事奉〳〵。物語りゆく　地クリ上　昔平相
國の所時。女女佛力自そ。温顔

●サシクセ獨吟

舞曲花めきて世にも名を得し遊女
ありしが。然れば妓王を召しおか
れて遊舞の寵愛甚しくて色香を
飾る玉衣の袖の白露起臥の簾の
内を立ち去らで。さながら宮女の如く
ありしに　思はざる外に佛を得て
佛御前を召されしより御心移りて
そのまゝ妓王は出されまゐらせて世を
秋風の音更けて涙の雨もをやみも
せず　げにや思ふ事適はねばこそ
浮世なれ。われは本より優しの花一時
の盛なれば散るを何とて怨みんや。嵐は
吹けども松はもとより常磐なり。その
歎き。その驚かん浮世ぞとて。思へざりける

ちりかの。来ることを教なれ。忘れも迷を
こゝろ（シテ上）
照まなる（次）絲竹の古國もそなたぞと
（地）頼みをかけて西山や。うきせの嵯峨の
（又）奥深き草の庵よ隠れがの隠れて住
むと思ひ。思の外なる佛殿前の。
様をかへ来りたり。こゝそもさるとても
かく捨つる身とあるりぬれど。猶も所身
の恨めしさの。執心残るよそもかてる
心持つ人かや。今こそ眞の。佛とそまし
ませと。教まへ手を合せ感涙を流せ
ばかり。（ロキ上）昔語りさて置きぬ。さて
今跡をとゞ給へ。（シテ上）身いまるへやらん
（下）われは誰とか岩代の。松の葉結ぶ露の
身の。行くへを何と問ひ給へ（地上）行くへ

何處て白雲の跡を見よとゝ此原の
草の庵いとゝ哀れや　露の身を置く
草堂の　地上　紅葉ゝ佛よとゝび捨て。
立ち去る影ハ草　夜。尾花ぐ袖の露
分け草堂のうちよりハ入りよけり　草堂
のうちよりハ入りよけり　中入

早上歌
待謡
松風寒き此原の。松風寒き此原の。
草の假寝のとこよ古法を物して
夜もすがら。かの跡とゝぞ。ありがたき
かの跡とゝぞ。ありがたき　後シテ上ノ一声　あらあり
がたの。御經や。はや明方ともなるや
らん。叡山の鐘も出よ響き。月落ち
かゝる山葛の。嵐烈しき假寝の床よ。
夢ぞ覺ます給よ　早カヽル上　不思議

やな佛の原の草枕よ。遊女の影の
見え給へ。いらさま向まつる佛殿前の。
幽霊とそ。まゝもらん　（まゝもらんとも）
なつかしき。古への。佛ていれ。名を便とて。（便とそとも）
輪廻の姿も歌舞をなすも　（輪廻）
界の中法の聲　（界）　（シテ）佛事をなすもや　（シテ）恥
此原の　（ロキリ）極楽せ
（シテ上）佛の舞の。妙なる袖

（地）草木も靡く。氣色かな　（シテ）序ノ舞　（地上）獨なほ。
佛の中名を。尋ねは見ん　（地上）おのく　（ホ上頭脇）
（地）又おのくかへる。　●仕舞
（シテ）法の場人の。法の場人の。（地上）法の
教も。幾程のせそや。（地上）前佛は過ぎぬ
（シテ）後佛はまだなり　（地上）夢の中の夢
せのうちぞや　（地上）鐘も響き　（シテ）鳥も
音をなく　（地上）よもの人　（シテ）ものうちなる夢幻の。

鐘のうちぞ。佛もあるまじ。まして人間も　合方　嵐吹く雲水の。天に浮めるはの。蘭の露の。袖の。歩。擧げざる先をとて。佛の舞をいとべけれど。謡ひもてて失せよ。失せよけりや謡ひもてて失せよけり。

解題

旅僧、越中立山地獄にて陸奥外の濱の獵師の幽霊に逢ひ、言傳にようて其妻子の許に到り、共に供養したるに、亡霊現れて冥途の苦患を語る。「陸奥の外の濱」なる呼子島島くなる聲はうとうやすかた」といふ歌に就きその俗説に基く作なり。或は島頭の字を當て、また別名を島頭八潟すかた」といふ。後世世阿弥の作と傳ふれども明ならず。親元日記（寛正）東田口猿楽記（永正）等に記録あり。

能之變式

外ノ濱風といふ小書附の能にありては、シテの「善知鳥はかへつて鷹となり」以下の文句を左の如く更へ、形にも常と更ふる處多し。

善知鳥

ことわりやわれなげらし。身よりこそわりやわれなげらし。身よりこそ出でも悪報のせめ。一人よきまでといふも。是ありやと人にとえて。作り罪をぞ。さんげよあらさまで。亡者の。姿はあるかもかよかげろふつく夜。あけゆく空は。外の濱かぜ波の音。うつつよ消えてさむる夢の。うつつよまでえて覺むる夢の。面影。暮笠よ殘るらんたゞみの笠ぞ殘りける

謡ひ方梗概

阿蘭鵜飼などに似て、まれまりは節も細く位も軽かるべけれども、通じて卑賤の躰を本とし、寂びて趣有るやうに扱ふ。シテ前は荒れすさびたる老人なれば、憶じて謡ひ無く衰へたる樣にもてなすべし。呼掛は聲を上に取らずして大きやかに確りと出で、ワキとの問答はこびて態なるべく、「や、思ひ出でたり」以下早ば獨言のやうに言ひ、「本書の麻衣の」云々

を抑へて、節を大事に扱ひ地へ渡す。**後**は前よりも位を進め、少しく勢を有つべきに、若しくしくなら
ぬやう、絹張き虜ありて続かるべし。**出**の詰は静に寂しく古歌を口すさむ心にて詰ひ出し、「一見年都
婆」云々よりサシの調子にて少しく素を起し、「永く三悪道をば」以下クドキの味はひにて高やかに詰ふ。あ
はれやげに古へは」云々は抑へて低びしげなる中に絹さらりと取り、「あらなつかしやとはんとすれば」と詰
みを本に素を掛けて地へ渡す。次のサシはすらりと扱ひ、クセの上端は
おつとり流ふ。「うとう」は大きく、「うとうは御て」云々は引き締めて出づ。**ツレ** 位大方常の如くなるべし。
「げにやもとより」云々は能めて一つとりと兼
獨慈むところなれば、サシの調子ながら絹静に流めなるべく、「これは夢かや」云々は
け、「いざや形見を」云々ようり素を更へて絹さらりと、「あれはとも」云々は高めにすらりとあるべし。
ワキ 尋常にして締り好きが宜し。**名告**は少し大きく確りと出で、一息の間をとり、「さてもわれ」
以下程好き運びをもちて寛りと詰ひ分けてだれめやう心し、**掛合**
後ツレとの**問答**は詞の長短それ〴〵に詰ひ分けてだれめやう心し、**掛合**
順次に詰め、「南無地蔵菩薩」云々とは別の調子にて、静に珠勝に扱ふ。**地前**の「これをしるしに
と附け、「疑ひも夏立つけふの」の**上歌**をさらりと附け、「やがて」「そのまま」より心持を少し更へて締め素味に鎖
は「疑ひ〴〵」と心持ありて、以下領めてぼんやり〴〵詰ひ納む。**輪**
め行く。「衆罪如霜露」云々の**下歌**は静に確りと兼け、**上歌**より絹引き立て、すらりと、景色を見渡す趣に
詰ひ、「横障の」云々の**上歌**は張みにかつてすらり〴〵とあるべし。**クリ**は確りとして運びを有ち、**サシ**はさら
りめに、**クセ**はさーて静めねども、軽しからず。大事に扱ひ、**上端**は少し位を進む。「親は空にて」云々は素を掛
けて確りと素り「かさくぎか」にて素りを外し、此一句やや大きく扱ふ。以下地獄羅素りの調子にて地及
なくどつーりと詰ひ、扱けぬやうに詰ひつづけ、同じ味はひにて少し能く詰ひ納む。

注意すべき詰ひ方

二枚裏の「木曽の麻衣の」は**揚貴妃**の「其初秋」、**女郎花**の「小野の頼風」など
の類にて、節附には中とあれども上吉と確り抑へたる如き調子にて詰ひ出し、
「木曽の」と「麻衣」との間を扱くが如く「ア」の吉を籠め、ハリを内へとり充分抑へて張る。

辞解

外の濱 古、陸奥國東津軽郡の青森湾に面せる沿海の地の汎称。或は今の青森市附近を
のみ呼ぶともいふ。西行の歌に「陸奥のれく中が〜くぞ思ほゆる壺の石ぶみ外の濱
風」。
立山 越中國中新川郡の東南に聳ゆる高峻。日本注華験記に「彼山有地獄原」。遥
廣山谷中、有百千出湯。怪深穴中、涌出。(中略)其原奥方有火柱」。常焼爆燃。此有大峰
名帝釈嶽」。是天帝釈冥官集会。勘定衆生善悪、虚実。(中略)従者傳言。日本國人造罪、多墮在立山地獄」
云々」。と。又今昔物語、宝物集等にも見え、今猶温泉、地獄谷、死出山、三途川などと称する喰雑の国所少からず。

禅定 行を修する事。**山路に分つ** 山中を地獄、餓鬼等の六つの衢に準へたる称呼のありしなるべし。**悪趣** 悪業に依りて趣く場所。地獄等。**慚愧** 自他の前に罪悪を懺ち愧づる修行上の要術
山下 山の下に懺悔を掛く。**上の空に** 漠然と扱へどころも無く。**やはか** いかでか。**承引** 聴き容れ。**今はの時** 命終の時。**尉** 老人。**木曽の麻衣** 著に掛けて出す。信濃の麻布は古く延喜式に見え、「信濃なる木曽の麻衣」などと歌に詠まれたるもの多し。**旅衣** 賜びに掛く。**雲や煙の云々** 地獄谷より雲煙の立ち上るを立山に掛く。**木の芽も云々** 古今集に「霞立ち木の芽も春の」云々とある類の詠法を借りて草木の萌むに地獄の火の燃ゆるを掛けて、時の春なるを遠くと継く。**客僧** 地より来れる僧。**あだに** 空しくは。**忘れがたみ** 忘れ難さといふを、遠したけ)る形見即ち遺児に掛く。**四季の田長** 郭公の異名。四季と死出と同意なる衣 蓑の代りに著る衣。見ると身の代りに著る衣とに掛く。**藤袴** 萬葉集に「須磨の海人の塩焼衣の藤衣間遠にしあれば未だ著なれず」とあるを借る。藤衣は藤を布に織りたる賤者の服にて、単に粗衣の意。間遠に織れるとは糸と糸との間のまばらに織りたるをいふ。こてには藤衣といふを、一度藤袴といひて、さて衣と後けたり。袴といふに深き意あるにあらず。**夏たつけふの** 疑ひ無しと掛け、更に夏の立つを衣の縁語裁ちに、今日を陸奥の狭布に掛く。新勅撰集に「夏衣たちかへてけるけふよりは山時鳥一重にぞ待つ」。**人名す** 衣を会せ縫ぶる意。**そで** そにての約。袖にかけていふ。**南無地蔵菩薩** 亡霊を弔ふ廻向文。生死輪廻の迷界を脱出し迷に菩提佛果を活得せよとなり。**呼子鳥** 古来説多けれども如何なる鳥なるか定かならず。普通には鳴く聲ものを呼ぶに似たりといひ傳ふ。謡曲以前の書或は歌集に斯かる鳥の名の絶えて見えざるは詳しき事なり。世阿弥より少し後の人なる一流巣良が書きたりと傳ふる鴉鷺いくさ物語に「子を思ふ湘の雨の暮の上にうとうとなくはやすかたの鳥」云々とあり、又鵜鶏(うとう)の文字も見ゆるは、或は北面の創作と何等かの関係有るには非ざるか。然れども、やすかたは今青森市に安方と称する町名あり、古へ洲潟の地なりしなるべく、安潟の意ならんか。うとうも去妻鏡に多宇末井(タウマヰ)の地、郡中名字に鵜取(ウトウ)と呼ぶ土豪の何れも陸奥國にありし事見ゆれば、或は地名かとも思はる。此「陸奥の」の一首古歌の如けれど何の集にも見えず。謡曲拾葉抄に

は拾遺名所和歌集（萬治年中）の説を採りて「定家卿の歌なり、夫木抄に入る」と記せど、夫木抄を繙あ他書にも但寄りの歌も無し。今青森に善知鳥神社、有岡塚（うとふづか）などあるは恐らく謡曲以後のものなるべし。

一見卒都婆 云々 塔婆南眼の偈文。卒都婆は無量の功德を具ふるもの中点一度拝見し、永く地獄餓鬼畜生の三惡道を遁れ得べしとなり。

いかにいはんや 云々 同偈の次句「何況造立者、必生安樂國」に據る。造立供養は佛菌を建立して其功德を廻向する世俗に所謂卒都婆即ち柱又は板に五輪の塔形を彫みたるものを立てての供養なるべし。

紅蓮、大紅蓮 いづれも佛説八寒地獄の中。紅蓮地獄は酷寒の為膚肉裂けて紅蓮華の如くになるといふより名づく。大紅蓮は其一層烈しきもの。

名歸智火 弥陀の名號南無阿弥陀佛と真實圓滿なる佛の智慧と。之を火に譬へて、寒氣も消え暖くなるべし。

焦熱、大焦熱 いづれも八熱地獄の中。焦熱地獄は獄火熾烈にして罪人を焦燒すること烈しく、大焦熱は其一層烈しきもの。

法水 佛法を水に譬へたる語。觀普賢經に「諸佛菩薩慧明法水云々」。

衆罪如霜露 云々 觀普賢經の偈に「衆罪如霜露、慧日能消除」。謡曲作者は實物集の引文に依りたるにや。

奥に海ある 陸奥の奥の字に重ねて思惟機海の功德は日光の霜露に於ける如く能く罪障を消除すとの意。

下枝 下方の枝。

汐屋 汐のさし引きする所に生ひたる屋。

末引きさしをとる 云々 屋の生ひ列れるが汐にしをれつゝ、浦里を圍む離しとれるを、陸前塩竈の沖なる離が島と外の濱とは遠く隔りて緣なけれども、陸奥と一つに云ふより同地方のものゝ如く扱ひたるなり。

苫屋形 苫を屋根形に葺きたるもの。

圍ふとすれど 云々 圍はんとしても主ばらなる苫屋の、月の為に卸つて風情あるる意。

あれはともいとほし 同法朝長の謡にもあり。苦悩、塩霊に聲をかくれば其姿消え失すと云ひ傳へしよりいふ。

千代壽 幼兒の假名。

橫障の雲 慧日の光を障蔽する煩惱の雲、觀普賢經に「我今所懺、眼根重罪障蔽慧眼、青無所見」。

姫小松 小さき松。こゝには千代童丸をさす。

木隱笠 姫小松の緣にて木隱れといひ、子の隱れて見えざる意に通はせ、手向の笠を呼び起す。

輪田の笠 今摂津國兵庫和田岬附近に在りし名松。夫木抄に「さして宿りの和だの笠木隱」などあるにて前の木隱笠を受く。

簑面の瀧 簑に掛けて出す。前岡國豊能郡箕面山中に在り。姫瀧

波を袖の涙にたとへ、波の緣語主つといひて卒都婆の逆主に掛く。

笠に隔てられて見えざりにまひなす。 松島は陸前の名勝。小島は其中に在る最も大なる島。新古今集に「松島やふ島の苫屋波にあらすな」などあり。

松島や小島の 云々 和漢朗詠集白樂天の詩句慈恩寺遊は苦遊びし人。泉に帰すとは死沒する事。

そとにたれ 卒都婆に苦を重ね。外に主てるは誰ぞと自ら問ふなり。

隔 橫障の雲の隔を結ぶ義。

士農工商 武士、農民、工夫、商人の職。管子は此四を國家の柱石といへり。

琴棋書畫 法書要録に出づ、何れも高尚なる嗜み。

遲々たる春の日 和漢朗詠集に「遲々兮春日」。遲々は日の永き貌。

所作もらねば 云々 殺生の仕事に出ると知らざれば日の永きもうつかり過すとの意。

秋の夜長し 云々 和漢朗詠集に「秋夜長、夜長無眠天未明」。

九夏 陰暦四、五、六の三月九十日。

玄冬 冬。

鹿を逐ふ 云々 「一事に熱して他を顧みざる喩」。淮南子に「逐鹿者不顧兎、又逐獸者日不見太山」。

忘草 萱草又は萱の異名。忘れもと掛けて草の緣語主ひの者をとうけて進鳥を呼び起す。

進鳥 鳴の四方より追ひ立て、鳥の主つを打ち又は射殺し或は鷹を放ちて捕ふる獵法。主に雉又は鶉に用ふ。

高縄 縄に鏑を結りて鳥のかくれを捕ふる獵法。主に雁、鳧の如き水禽に用ふ。

さしひく 鳥をさす手を引く事。ひくは主をさす事。ひくとは主ふを受けて汐を出す。

末の松山 陸前國宮城郡八幡沿海の沙丘をいふとぞ。古今集に「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなむ」とあるより、波こす、汐こすなど詠みたる古歌多きを引く。新千載集に「知られじ」なかはる契の末の松神に波越す恨ありとは」などあり。これも同じみちのくなれば茲に出す。

沖の石 千載集に「我が袖は汐干に見えぬ沖の石の人こそ知らねかわくまもなき」とあるを惜らにも妻や子が、前（「奥に海ある」の解）に引けける夫木の歌にも「汐干のかたの思ひ」などあれば、それこれ取り合はせていふなるべし。千潟は此歌の「汐干」に寄せて云へるにて潮の干たる潟の意なるかと、同じくみちのくの名勝千賀の塩竈に掛け塩竈は汐を焼くもの中点、それに寄せて身を焦すといひ、今妻子に近づきながら徒に身を焦す心を兼ぬ。風雅集に「身を焦す契ばかりか徒に思はぬなかの千賀の塩竈」。

業 仕事。

とりぐに 云々 やすかたの鳥と受けて、とりぐに、隔てなる獵法の中にもとゝひ次ぐ。

鳬 凡を鳥といふ。凡のはの意。

巧波顔の 云々 筑波顔は常陸にある山

にて、木立繁きこと古歌に多くよまれたれば木との枕とぞひつぐ。**類波** 葉の吉にて羽を敷くといひ、敷くを類に寄すする波（類波）に掛け、波の縁にて以下水禽に縁を移す。**浮巣** 波に浮く新撰拾遺集に「浮巣をかけてこほちぬ池水」。**かけよかし** 送れとの意を紛めていふ。**平沙に** 平沙落雁に詞を借る。雁は水沢沙立に宿る鳥なり。蘆にてはうとうとやすかたの鳥と一つに見て綴れる にや。北邊の文脈即が解し難き節あり。或は創作時代の文字変遷ありしなるべし。**呼ばれて** 云 猟師てが親鳥の鳥く聲を振してうとうといへば親鳥かと思ひて子鳥はやすかたと答ふといふ説は前場の「なくなる聲はうとうとしといふをやすかたに掛く。此、うとうと乎べば子鳥やすかたの歌につきての俗説なるが、此俗説と北辰曲とは何れが前なるか判じ難し。或は北曲保元物語鬼が島やすかた」の歌につきての俗説なるが、此俗説と北辰曲とは何れが前なるか判じ難し。或は北曲保元物語鬼が島（隠れ笠、隠れ蓑のことなどをも記せる）の條に「身を隠し聲を学びて呼べば、その聲につきて鳥多く飛び入るを穴の口を塞ぎて用取にするなりといふ」とあるに想を得たるものにて、俗説は此曲より生れたるには非ざるか。**親は空にて** 云 法苑珠林に地獄経を引きて「諸鳥失子悲鳴悲叫衆眼中血出」。**蓑** 蓑にて造りたる蓑。**隠笠隠蓑** 之を著るものは其形を人に見られず、又人の隠し事を見聞し得と想像せられたる賓、我が笠蓑はかゝる賓にもあらねば隠れ終せずとなり。**用もくれなる** 用のくらむを血涙の為に紅くなりたるに掛く。**紅葉の橋** くれなゐに重ねて紅葉、波ろに囲みて橋と怪ぐ。七夕の夜鳥と鵲と羽を並べて橋となりし事牛織女を渡す。北二星の別れの涙羽に深みて紅になるといひ陳へ、古今集に「天の門もみぢを橋に渡せばや」そゝとあちなどに想を得て綴る。かさゝぎを笠に通はせたり。**怪鳥** 往生要集無間地獄の項に「有悪鳥、身大如象、口開婆、喙利出炎、執罪人、逆上空中、東西遊行、又甚轉」。**眼をつかんで** 同書同項に此鳥「探啖眼睛、而敢食之」。**しゝむら** 同時使有鐵嘴大鳥、上彼（罪人）頭上、或上甚轉」。**さけばん** 裂くに叫ぶを掛く。同書等活地獄の項に右叉鉄爪、身解の肉。**猛火の煙に** 云 同書無間地獄の項に、阿鼻城の四面に四の鋼狗有り「一切毛孔、皆出猛火、其烟臭悪世間無斉」と。**鷲鷲** 亜に掛く。**羽脱鳥** 羽の脱け変る頃の鳥。**鷹となり** 鷹は大なり、共に地獄にて罪人を敢食追責すとゝ、はれたる鳥なれば、姿婆の時とは対に己が雄となりて慢まさるとなり。**文野** 通れ難しといふを変く。文野は河内国北河内郡の遊猟地。**吹雪** 鷹狩は古くは冬の行事の一にて雪中の古歌も多ければ吹雪を出す。新撰古今集に「御狩せし狩場の跡も今は世にあはれ文野の雪のふる道」。

四番目
畧二番

善知鳥

四月

後ヅレ 猟師ノ妻 子方 千代童
シテ 猟師ノ幽霊
ワキ 旅僧 （詞ナシ）

早笛

これい諸國一見の僧にてゐ。われ未だ陸奥路の濱を見ぬ程よ。此度思ひたちそ路の濱一見と志してゐ。よきついでにてい程よ。立山禪定申さばやと存ゐ。急ぎい程よ。これいはや立山よ著きてゐ。心静よ一見せばやと思ひゐ。さても

見えもぞ程よ

われ此立山より来て見れば、まのあたり
なる地獄の有様。見ても恐れぬ人の心は。
鬼神より猶恐ろしや。山路より分つ獵
の業。多くは悪趣の嶮路ぞと。戻も更よ
留めえぬ。慚愧の心時過ぎて。山下よ
とそはやりけれ。山下りけれ

呼掛 シテ

のうのうあれなる所僧に申まをべき事

の儀 ワキ 何事にてをぞ シテ 陸奥へ下り
いそぐ。言傳申べし。ト。月の濱にて獵師
にて者の。去年の秋みまかりて。其
妻やどの宿を所尋ねひて。それより
蓑笠手向けてくれよと。作せ
ワキ これ思ひもよらぬ事をぞ。
屈け申まをべき事。八日易き程の所事にて

いさりをぐらの宮よ申してややかに
歌ふべき　シテ　げに確なる志るべ
なくてゝ
とびあるまじ。や。思ひ出でたり在りし
世の今日の時まで。此尉が。木曾の麻衣
地上歌
の袖を解きて　とれを志るしとて。
涙を添へて旅衣。戻を添へて旅衣。立ち
別れ行く其跡は。雲や煙の立山の。木の

芽も萌ゆる遠くと。客僧は奥へ下れば。
子者は泣く泣く見送りて行く方知らぞ
ありよけり行く方知らぞありよけり　中入
ツレ上
げよや本よりも定なきせの習ぞと。
思ひなぐらも夢よのせのあだよ契り
恩愛の別の後の忘しがたみそれさへ
涙き悲みの母ぐ思をいうよせん　早笛
いうよ

此屋の内へ案内申いたん　誰　連て渡
りいぞ　早　これい諸國一巡の僧　連ていぐ。
立山禪定申い處ぢよ。其樣荒まき老
ぐのあり　ぐ。陸奥へ下らぐ言傳をべ。
外の濱ぢてい獵師ぢてい者の。去年の
秋みまあり　てい。其妻子の宿を尋ねて。
それ　の蓑笠手　向けてくれよと作せ

い程よ。上の空ぢ申してい　やぢか　部引
いべきと申していべ。其時召されたる麻
衣の袖を解きて賜ぢりてい程よ。これ
まで持ちて参りてい　も思　めあぢ
ぢる事のいか　これい夢ぢや浅まぢや。
四手の田長のとき人の。上向きあへぬ
涙ぢ。さりあぐら餘りよ心もとあるぢ

事なれば。いざや形見を蓑代衣。向遠
よ織れる藤袴。頃も久しきかたみ
なれども。今取り出し。よく見れば
地上歌
疑ひも。夏立つけふの薄衣。夏立つ
けふの薄衣。一重なれども合はれば。
そでありけるぞあらまほしのかた
みややがてそのまゝ弔ひの。法を重ね

數々の。中よりも者の頃むなる。蓑笠を
とそ。手向けけれ蓑笠をとそ手向け
けれ。早南無幽霊出離生死頓證
菩提。後シテ一声陸奥の。外の濱なる。呼子鳥。
鳴くなる聲ハうとやさかた。一見し
卒塔婆永離三悪道。此文の如くば。
假令拝申したりとも。永く三悪道

をば通るべし。いろよいもんや此身のため。
岩ヶ上供養よ願らんをや。假令紅蓮
大紅蓮なりとも。名號智火よ消え
ぬべし。佳熱大佳熱なりとも法水よ
勝たじ。さりながら此身ハ重き罪科の
ふかいとらやまたの。鳥獸を殺し
衆罪如霜露慧日の日よ照し給へ

地下歌 カヘテ 慧日の日よ

●小謡

上歌 ㋐曾我・處ハ陸奥の。處ハ陸奥の。奥
よ海なる松原の。下枝よ文るゆ蘆の。
末らき志をる浦里の籬ゲ島の苫屋弁
圍ふそまれで躁よて。月のためよ
ドの濱心ありける。なまひなる心あり
ける住まひかな。あれいともいそぐ
形や清えなんと。親子手よ手を取り組

みて。泣くぞ物なる。有様なる　シテ「哀や
げに去へ。さても契りし妻やなも。今は
うとうの音よ泣きて。やまたの島の
安からぬぞや。何しに殺しけん。我が子の
いとほしきかくよとて。鳥獣も思ふ
らめと。千代童髪をかき撫で。
あらなつかしやとていとんとまれぬ

地上歌

横障の。雲の隔ら悲しや苔。雲の隔ら
悲しや苔。今まで見えて姫小松のはか
やいづくよ。未憑笠ぞ津の國の。輪田
の笠松や。箕面の滝つ波も我が袖よ。
立つや卒塔婆のそとたい。哀笠ぞ
隔ありけるや。松島や。小島の苫屋うち
ゆかれ外の濱千鳥。音よ立てく

行くより外の事ぞなき　往き事渉
花とてまべて夢よ似たり。春遊遥
落ちてなつぞ。帰よ帰まで　とても
渡せを焼まど。士農工商の家も生
ねぞ　又琴碁書画をたしなむ身
もならぞ　唯明けても暮れても
殺生を営み　磨たる春の日も所作

思らねぞ時を失ひ。秋の夜長夜長
けれども。漁火白うして眠る事なし
九夏の天も。暑を忘れ　言葉の朝
も寒からぞ　鹿を追ふ猟師ハ。山を
見ぞてい事あり。身の苦さも悲
しさも。忘草の追島高場をさひく
ほの。末の松山風荒れて。袖よは越を中

の石。又い千潟そて。海越しなりし里ま
でも。千賀の塩竈身を隱さて。報をも
忘れける事業を知り、悔さよ。そも
そもうそうそ。やまかたのそりくよ品
変りたる殺生の中よ無慚やな此
島の愚なるかな紙波嶺の。木ごの
捕るも羽を頻波の浮巣をもかけよ

かし。平沙よりを生みて落雁のはら
なや親い隱さそ。それでうそうと呼ぶ
れて子いやまかたと答へけりさてぞ
取られやまかた　うそう　見い空
そて血の涙を。親い空して血の涙を。
降らせば濡れじと菅蓑や。笠を傾け
こゝかこの。便を求めて隱笠蓑

●仕舞

よもあらぶれば。猫隠りかくる。血のなみ
だよ。目もくれるあるよ深み渡るは。紅葉の
はしのぬさぎさか。（打上謡頭打切）あ渡まてハ
うそうやまかたて見えても。（替打切中ノリ）うそうやまか
たて見えても。宵の余遠ゆてハ。化鳥と
なり罪人を追つ立て鐵の。嘴を鳴ら。
羽をたゝき鋼の爪を。磨ぎ立てゝハ。眼を

つかんで肉をさけぶとまれぐも猫火
の煙よむせんで聲を。上げ得ぬを。鴉
鷲を殺〻。科やらん。遁げんとまれど。
立ち得ぬ。羽脱け島の報ら。（甲シテ中）うそうハ。
却て鷹ぞなり。われハ雉ぞなり
たりける。遁れ文野の狩場の吹雪よ。
空も恐ろ地をとる。大鷹よ責めら

れて。あら心うそうやまた。安き隙
あるき身の苦みを。助けてたべや。門僧
助けてたべや。門僧
先せよけり。

小塩

解題 大原野の花盛を背景に、伊勢物語の文と歌とを辭句の後とし、都の人、在原業平の典雅なる亡霊に逢ふことを作れり。毛端紅珍抄、禪風習道用録等に曲名見ゆ。能本作者注文、二百十番謡目録に金春禪竹作とあり。又、藤涼軒日録に寛正六年九月春日社の祭禮に竹田太夫が演ぜりと見ゆる小原野花見とは思ふに故曲を指すなるべし。

謡ひ方梗概 雲林院に酷似したれども、それ程に住重からず。弱々しく浮かれ出づる体なれば少し浮きやかなるべし。笑づ一聲は以上の心得にて音を少し低めに取り、サシよりは情さらりとなり、上歌は花やげる心ばえにて朗らかに謡ふべし。「思ひよらずや」云しの調は少し静に言ひ、カケルにてさらりとなり、次の掛合は興に入る心にて喚次位を進め、うらゝかなる天色を寄す。「夢幻しき阿事かな」云しは確りと出で、「申すにつけて」より位を有ちて少し心して謡ふ。ロンギは素直に朗かなるべし。緩は品好く若やぎて花々しきを宜しとす。此心得にて「月やあらぬ」を一聲に謡ひ、ワキとの掛合を優にすらりと出で一息間をとり、ワカは長閑に花やかなる「昔かな」を寛りと出で一息間をとり、ワカは長閑に花やかなるべく、地との掛合、素つて精麗に趣あるやう謡ひ納むべし。「不思議やな」云しのサシはすらりとあるべし。素謡にてはワキツレを要せず。

辭解 **大原野** 山城國乙訓郡、今の大原野村の地。京都市の西南約四里。此地に大原野社あり。長岡遷都の時、皇后藤原乙牟漏（一に藤原左嗣ともいふ）が本拝に便ぜんため春日明神を勧請

花にうつらふ 櫻の花にまかはしき美しき雲が、遠く麓にかくれうつると云ひて、花のことのみ心にかゝる意に続く。**下京** 京都市の内昔四條以南の地名。**大原野社** 藤原氏の氏神。**桓武天皇** 四條以南の地名。

したりといふ詞あり。宗祇春日に等しく、行幸路の事史にも見申。現に官幣大社たり。此社は此曲の背景をなすものなれば其心にて見るべきなり。**大原山** 古く大原野社の西より南の方今の小塩村あたりまでの山を称したるもの。又小塩山ともいふ。**いづくはあれど** 何處何處と處は多けれどの意。古今集に「陸奥はいづくはあれど塩竈の」とも。**消から** 枯武天皇大原野に近き長岡の地に遷都し給ひしを含みて都を云ひ起す。**名にしあふる** 花の都といふ詞あれば、さすが古都の地なり、和に背かず花も盛なりとなり。**木綿花の** 云 「来緯花の」は「来け」の枕詞なりと、者の似通ひたる「風に積け」云ふの意。**手向の袖** 花が直に神前の手向となる意と、花見の人の必ず神に奉拝する意とを兼ねて出し、櫻の為に下行く人の袖も美しく見ゆる意にて懸る。いとしほは袖の縁語なり。**神も交はる** 云 佛菩薩が衆生済度の為その德光を和げて世塵に交はるを和光同塵といへり。神佛不二の說に基き是を神の上に用ひたる例多きにより、其詞を借り来りて神人共に美しき櫻花を賞する意とす。**栞して** 云 栞は道の過ぎし處の木の枝を折ることと。こゝには仮に栞と見たてゝ櫻花を折りかざす身なれども、衰へたる老人なれば、人目には老木の栞と見らるゝに過ぎざるべしとなり。**年ふれば** 云 古今集藤原良房の歌。**白雪と** 云 「春の日の光にあたるわれなれど頭の雪となるぞ悲しき」。**散りもせず** 云 「げふ見ずばくやしからまし櫻花風吹きも残らず散りも初めず」といふ歌を引く。此歌駿馬天狗の謡にも出でゝ、拾葉抄には定家卿の歌と記せども出處明ならず。**情の道** 物の家を知る心といふ程の意。**花心** 花やかなる心。**心なき山賤の** 云 源氏物語に「もの情知らぬ山賤も花の蔭にはなほやすらはまほしきにや」などあるに意を取るにや。山賤は樵夫。**姿こそ** 云 集に出でたる業平法師の歌「形こそみ山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなん」を引く。拾葉抄に「姿こそ」以下(末の句「なさばならめや」)を夫木抄に出でたる紀友則の歌とし、たれども、此歌同集をはじめ何れの集にも無し。かせきは庭なり。こゝには姿は庭の如く見苦しくとも心は花の如くなさばなるべしとなり。こゝの句、寛永版以前の湯浅本には「心は花になさばこそ、ならばならめや」とあり。**心から** 心次第にて。**をかしとこそは** 云 前掲の歌の詞書に「女どもの見て笑ひければよめる」とある意を取る。**埋木の** 云 世に埋れ居る身なれど恋はみ山がくれの埋木の朽ちはてぬとも人に知られじ。**色も香も** 云 古今集の歌「君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」の句を借りて、知らずに問ひ給ふなの意に続ぶ。**いふに及ばぬ** 云はんとしても、詞は迚も及ひ難き意。**うつらふ影も** 花の色の映りて美しき影の多きを大原や小塩の山の小原に云ひかけ、次の歌に続く。**小塩の山の** 云 後拾遺集の貫之の歌「大原や小塩の山の小松原はや木高かれ千代の陰見ん」を引く。**家櫻** 山櫻に對して庭に移し植ゑたる櫻をいふ。**あかねさす** 日といふ詞に冠する枕詞。日も暮るゝを紅にかく。**八重九重** 彩雲紅霞の立ち重れるを九重の都に云ひかく。九重の都は帝都。**都邊は** 云 定家の歌に「都邊はなべて錦と(一本に)なりにけり嶺を飾らぬ人しなければ」。**時も日も** 云 時は春といひかけて、月の三月(弥生)なるを云ふ。**げにや大原や** 云 日も春と云ひて春日の神と思ひ出でたる心にて業平の歌を引く。「大原や小塩の山もけふこそは神代のことも思ひいづらめ」。これは昔業平と契ありし藤原長良の女高子、後に二條の后といはれ給ひしが、その未だ春宮の御息所と云ひしころ、藤氏の氏神なる大原野の社に詣でし時、御供のうちにありし業平(伊勢物語原文には「近衛府にさぶらひける舞」)がよめる歌として伊勢物語に出でしものなり。歌意は、今日天児屋尊の孫苗たる高子が御息所として時めけるを見ては神も其昔天忍穂耳尊に從ひて等を扶け奉りし當時を思ひ出づるなるらんとの意を表し、裏に業平が昔高子と契りし頃の事を思ひ出し給へとの意を含めるものにして文實にあらず。殊に親王の御子なる業平が藤氏の氏神詣に扈從する謂も無し。**業平** 平城天皇の皇子阿保親王の第五子。見行平と共に在原姓を賜ひし人。**后** 前記藤原高子をさす。**妹背** 契りた男女。**名殘をしぼ** 云 名殘惜しきを小塩にかく。前に浅からぬと云へるを受けて山深みと云ひ、山の縁にてのぼりての世と續く。**のぼりての世** 昔の世。**昔男** 伊勢物語の一節毎に「昔男ありけり」と書き出せるを、後人皆業平の事と記せるものと解した。**しばふる人** 源氏物語に出づる詞。木の葉などを焼き集むる賤の男、老人、しばぶきする人等、時代種々あれども明ならず。**心知られば** 心を知られたらんにはの意に心知られたりけれ。或は「心しあれば」の誤か。**老隠るやと** 古今集に「雪のかさにぬふてふ梅の花折りてかざさん老かくるやと」を借る。**ここのもかのも** ここなたかなた。古今集に「このもかのもに産はあれど」云し。**花のながえ** 車の轅と花の枝とを兼ぬ。**よろぼひさぞらひ** よろめき、さまよひ。**天も花にや** 云 和漢朗詠集に「天酔于花、桃李風也」。**かげろふ人** 春の陽炎をかげろふと云ひ、陽炎に映

りて長閑なる太陽をかげろふ日といふ。此河の日より轉下て人に後く。或には影の薄れゆく人の意。和光の影「神も変はらの」の解釋に出せる和光同塵と云ひつゞく。業平と神佛の如く扱ひ奉出海度の為和光同塵の姿を現じたるものゝ如くいふ。たまさか 稀なること。霊の玉と愛前に花心の詩を置きて妙法蓮華經に通はす。月やあらぬ 下の句「わが身ひとつはもとの身にして」。やごとなき 貴き。車の やの 蓮 にかゝる。雲の上 禁中を雲の上といふにより、茲は高子の后を雲上の花に喩へ、及び貴き意を籠む。他生の縁 前世よりの因縁。けふこずは 今日も暮れつ。大宮人、雲の上人、共に禁裏の人の意。暮るゝ 車の軸を樞（くるゝ）といふ。業平の歌。櫻かざし 新古今集に「百敷の大宮人はいとまあれや桜かざして今日も暮れつ」。春宵一刻 蘇東坡の詩句「春宵一刻直千金、花有清香月有陰」。思ふこと 伊勢物語の歌。思ひうちより 伊勢物語に前の歌の次に出ず。時雨に「思有二於内一必形二於外一」。春日野の 古今集河原左大臣（融）の歌。伊勢物語「限知られず」。陸奥の 古今集に「陸奥の紙を思ふまで伊勢物語の歌。業平の陸奥に下る途にて詠み一歌なり。心の奥 人を思ふ心の奥に陸奥を兼ぬ。以下いさ知らず、白雲、雲のくだり、くだり月、月の郡、郡の東山、東と同字なるあづま、あづまの果、果しなと順次云ひかゝる。下り月 十五日以降の月。こゝには業平の陸奥に下りしを寫す。はてしな 果を知らざること。陸奥はあづまの果なると愛く。武藏野は 武藏野の果也と云ひ則はしたるにより、前句を受けて出す。伊勢物語の歌なり。赤句「われもこそしれり」。古今集には初句を「春日野は」に作る。此武藏野は奈良の春日野の一名なるとゝにはあづまの武藏野の如く扱ひて出す。こもる心 思しく物ふ種。それを忘草にかけて忘はゝ 聞に置ある思の子 戀ぐさ れめやといふ。忘れめやは忘れ草の意。まどろめば 伊勢物語の歌「寢ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな」を胸に置きて撮る。夢か覺か 古今集に出でたる女と業平との贈答の歌に、女「君やこゝわれやゆきけんおもほえず夢か覺かぬてかさめてか」、業平「かきくらす心の闇にまどひにき夢覺とはよひと定めよ」。此事伊勢物語にも出でたるか、これには業平の歌の赤句を「こよひ定めよ」とせり。

四番目
畧三番

早苗（三人）
ツヨク

花ようろう顔の雲花ようろう顔の雲かゝるや心なるらん

小塩

シオ

三月

シテ 在原業平ノ霊（前ハ老翁）
ワキ 男

者ハ。下京邊（シモキヨウヘン）遊ばまひまする者まそ。
さても大原野（オオハラ）の花。今を盛（サカリ）なるより
承り及びい同。若き人ゞを伴（トモナイ）ひ申し。
唯今大原山へと急ぎは 面白やゞ

くんあれで處なら。花も都の名ゝ負
へる。大原山の花櫻　上歌（三人）　今を盛と木綿
花の。今を盛と木綿花の。手向の袖も
ひとゝほよ。色そよ春の時を得て。神　打切
も立る塵の世の。花や心よ任せらん
花や心よ任せらん　上歌（三人）　榮て。花を
ぎゝの袖なら。老木の榮て。人や見ん　打上

サシ上
年古れど齢ハ老いぬ然いあれど。花
を見れば物思ふも。なつと詠みしも身
のよそ。今白雪を載くまで。ぞよ當る
春の日の。長閑けき代の時あれや　上歌
打切　歌りもせぬ。咲きも殘らぬ花盛。咲き
も殘らぬ花盛。四方の氣色もひとゝ
ほよ。ほゝ仮ほゝ満ちぬ色よ深よ。情の道よ

譲らるゝ。老が厭ひぞ花心。老が厭ひぞ
花ごゝろ。不思議やな貴賤群集の
其中に。殊に年たけたる老人花の枝を
かざし。さも花やかに見え給へり。そも
何処より来り給ふぞ　思ひよらずや
貴賤の中にわきて言葉をかけ給へる。
さも心なき山賤の。身にも應せぬ花
ざすぞと。お笑ひあるか人々よ　姿こそ
山のかせぎに似たりとも。心は花に
ならばこそ。なすぞならめや心から
若しとこそは臨見ざらめ。よしや此
身は埋木の朽ちは。果てしなや心の。
色も香も知る人ぞ知らぞな向かせ
給ひて　あら面白の戯れやなよも

眞(マコト)に腹立て絵もで。いろさまゆゑある心
言葉の奥(オク)ゆかしきを語り給へ　何(シテ)と
語らん花盛(ロキカン上)りよりなどぬ氣色をぞ。
いろぶ思ひ給へらん　げに(ロキカン上)　妙なる
梢の色。うつろふ蔭も大原や　小塩(シテ)の
山の小松(コ)が原より。煙(ケム)る霞の遠山櫻(トオヤマザクラ)
里(ロキカン上)は軒端の家櫻　白(シテ)ふや窓の梅も

地拍子
又　花衣(ハナゴロモ)きよけりな
花衣(ハナゴロモ)きよけりな

●小謡

咲き　あかねさす日も紅の　霞(シテ)
雲(シテ)　八重(地上歌)　九重の　都(ロキ)遠(ロキ)。をぐて
錦(ニシキ)なりよけり。をぐて錦となりよけり。
櫻を折らぬ人(シテ)なき。花衣きよけりな。
時も日も弥生(ヤヨイ)。合(ロキ)ひよ合ひ明(ロキ)なり。
げにや大原や。小塩の山もけふとてい
神代も思ひ。知られけり。神代も思ひ知

イキテ
られけれ。早河
かるる面白き人よ。糸りあひ
ていものかな。此まして所供申し花をも眺
めうぎるもそてゆ。唯今の言葉の末よ。
中ニニニニニニニニニニニニ
大原や小塩の山もけふこそは。神代の事も
思ひ出づらめ。今は處から面白うゆ。これい
いうる人の密詠歌もそてゆぞ。事新
しき問事かな。此大原野の行幸よ。

此の序供申し。

在原の業平供奉し絵ひ時。恭くも
居の所事を思ひ出でて。神代の事を
詠みしとかり。申まそつけてわれなどら。
そら恐ろしや天地の神の古代より人
の身の妹背の道い浅からぬ。地上歌 名残
小塩の山深みのぼ
りその世の物語。語るも昔男。面立れ

古りぬる身の程歎きても。かひなかりけり歎きても。かひぞなりける。げに山賤のさもげに。たぐふる人と見ゆるも。心ありける姿かな　心知られば

地上　そても身の姿よ恥ぢぬ花の友よ馴れてさらば交らん

地上　交れや交れ老人の。心若木の花の枝　老隠るやとなざ

地上　さん　なざしの袖を引きとられ。とのもかのもの蔭ごとよ　貴賤の花見

地　嘆車の。花の轅をなざつれて。よろぼひさそらひそとりぐるまの。盃の。

地上　天も花よや酔へらん紅うづむよ霞。なげろよ人の面影ありと見えつ。失せよけりありと見えつ失せよけり

口半行 不思議や今の老人の常人ならぬ見
えつるが。さていふ小塩の神代の古跡。和光
の影よ業平の。花よ映じて無尽濟
度の。姿現し給へとぞ　上歌（三人）待謡　思の露も
たまさかの思の露もたまさかの。光を
見るも花心。妙なる法の道のべよ。猶も
奇特を待ち居たり猶も奇特を待ち
居たり　後シテ出　月やあらぬ。春や昔の春
又うなれども。我が身ぞもとの。身も知らで
ならぬ。我が身ぞもとの。身も知らで
口半カケ上 不思議や。今まで。立つても知らぬ
花見車の。やどるきくの内有様。
これいふなる事やらん　げにや及ぶぬ
雲の上。花の姿よも知らで。あり神
カケ上 代の物語。姿現さでぞあり。あり　口半 あら

●小謡

ありすたのむ事や他生の縁に打ちも
せで、契りし人も様ごよ　早思ひぞ
いづる　地上歌　花も今　ふとぞ明日ハ
雪とぞ降りぬまし。明日ハ雪とぞ降り
ぬまし。消えぬとぞ　ありて。花と見まや
と詠ぜしよ。今ぞ花も雪も。皆
白雲の上べの櫻。ひざの袖ふれて花

地　柏子

花見車。暮るるより月の花よ待たるよ。
クリ上ヒ　それ春宵一刻値千金。花よ清香月
影。惜まるべきさて唯この時なり
シテサシ上ヒ　●サシクセ獨吟　●思ふ事いとでは唯よや止みぬべき
地　われよ等きさんなれぞ思へ
ぞ人知れぬ。心の色ハおのづから思
ふ事ハ。露ごよ濡れける

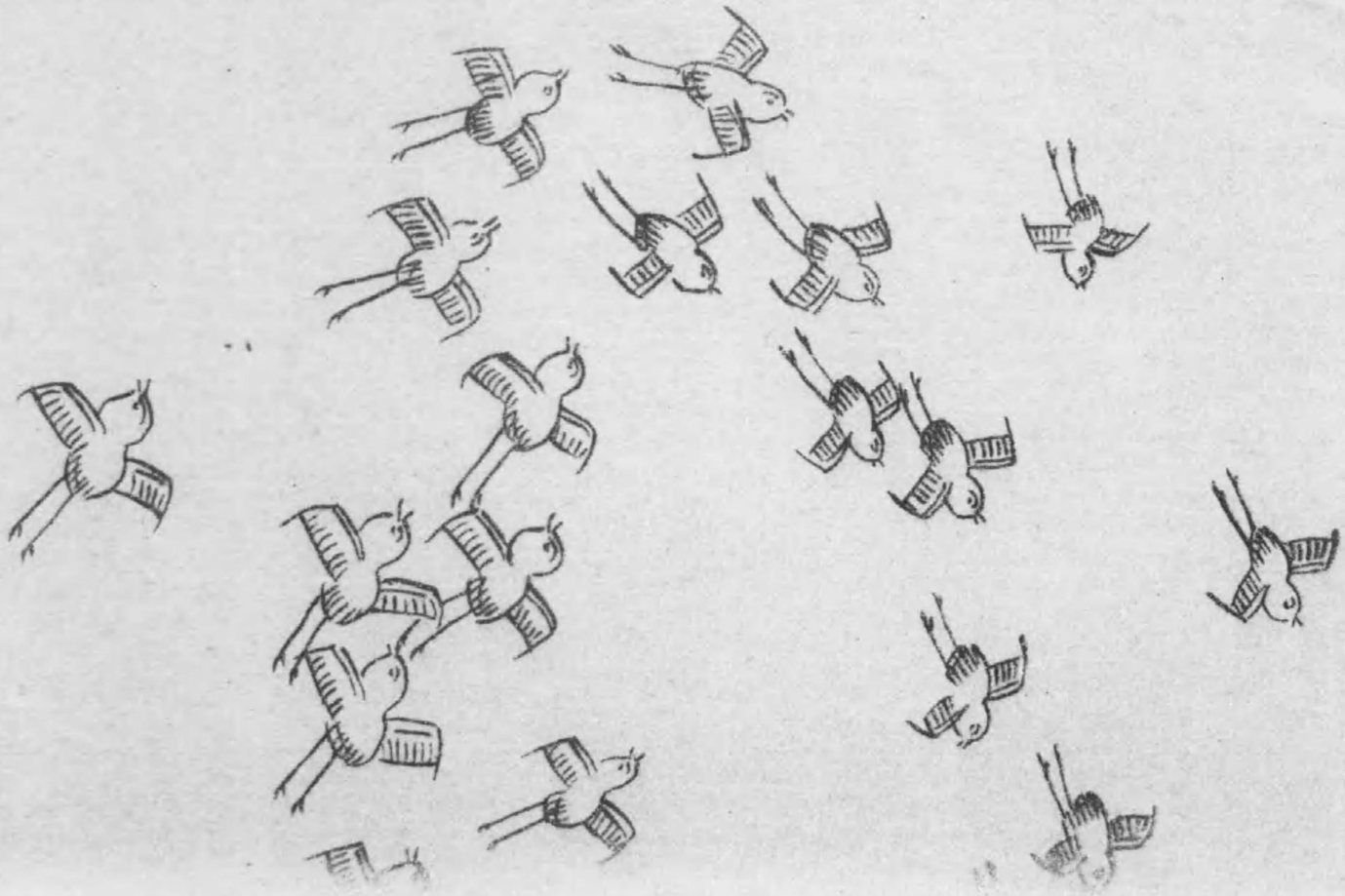
●仕舞

地拍子
われならぬ人ぞ
又
われならぬ人ぞ
能、三番目ノ時ハ
めでたかり。

仕テ クセ中ニ
ぞや　ヒ切ヤ　●春日野の。若紫のまそ鏡。
中ニ
去のぶの乱れ。長知らぬもと詠せしよ。
陸奥の信夫もぢずり誰ゆゑ乱れんと
思ふ。われならぬ人ぞ詠みしも紫の
色よ深み香よめでたかり。ふ唐衣。
著つなれ。つまあれば。遠ぢ来
ぬる。旅をぞ思ふ心の奥までいさ

白雲のくだり日の都なれや東山。
これも京あづまのはてなる人の心や
シテ上ヒ
武蔵野。ハ。けふ焼きそ若草の
地
妻もこもれりわれもまたこもる心は大
原や。小塩よ賣く道路の。行くへは同じ
恋種の。忘れめや。今も名に昔男ぞと
シテ中ニ
人もいふ。　序舞　昔なる。花

許可なく複製を禁ず
著作者兼印刷者　東京市神田区今川小路三丁目九番地　丸善株式会社
発行者　東京市神田区今川小路三丁目九番地　丸善株式会社
印刷者　東京市神田区錦町十三番地　大日本印刷株式会社
印刷所　東京市神田区今川小路三丁目九番地　丸善株式会社
発行所　東京市神田区今川小路三丁目九番地　丸善株式会社
電話九段二一三四七〇五番
振替貯金東京一一三番
大正十年十月三十日　印刷
大正十年十月三十一日　発行
訂正者兼発行者　東京市神田区今川小路三丁目九番地　丸善株式会社
代表者　岡田明佳
親世流改訂本
昭和四版・大正版



終